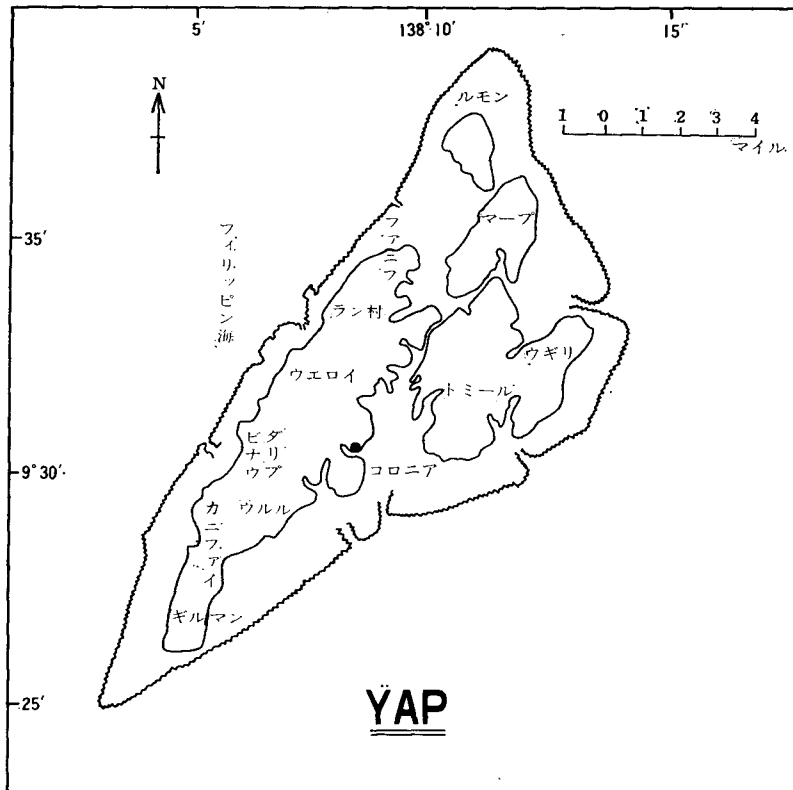


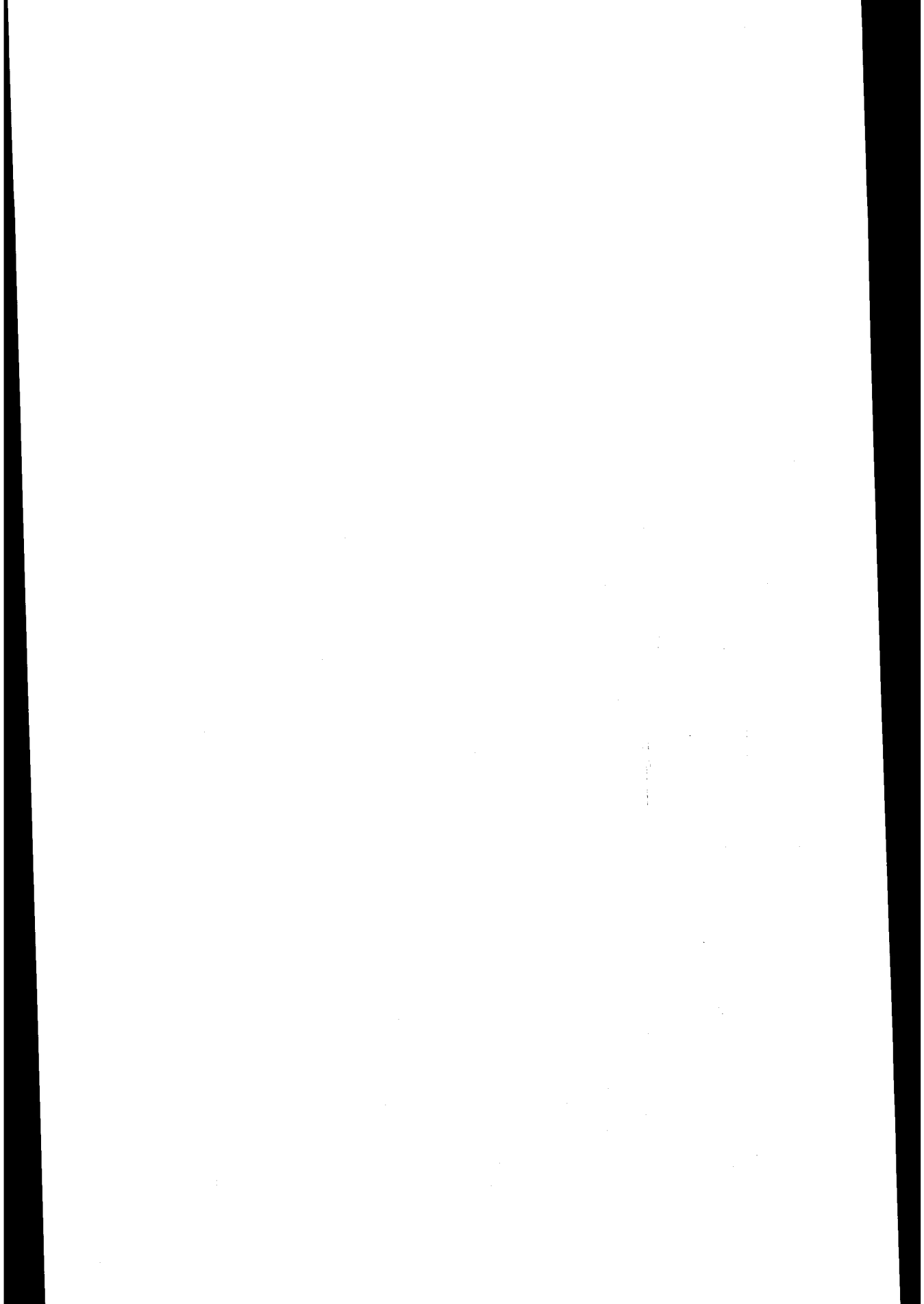
ミクロネシア・ヤップ島民族学的調査予備報告

—ファニフ管区ラン村の事例を中心に—

牛 島 巖

1. 土地利用の概略
2. 人口減少
3. 階級（サール）
4. 村（ビナウ）
5. ラン村の政治組織
6. 土地保有とタビナウ
7. 土地相続の諸様式
8. ラン村の土地所有・相続様式
9. 性と年齢によるカテゴリー
10. ラン村のタロ芋田の使用
11. トブグルとタアイ
12. クロウ型親族名称と父の姉妹
13. 儀礼的交換





本報告は、昭和49年及び51年に予定している本調査に向けて、48年8・9月に実施した予備調査⁽¹⁾においてえた資料にもとづくものである。この小論は北西海岸のファニフ管区ラン村の事例にもとづいて、主に村落構成、土地所有、貨幣、親族名称、資源利用等々に関する問題の所在を提示することを目的にし、合せて若干のデータ-をまとめたものである。すなわち、調査地ラン村の社会システムの考察から、今後のヤップ島各村の調査において究明すべき局面を指摘し、合せて若干の資料を提供するのが、この報告の目的である。

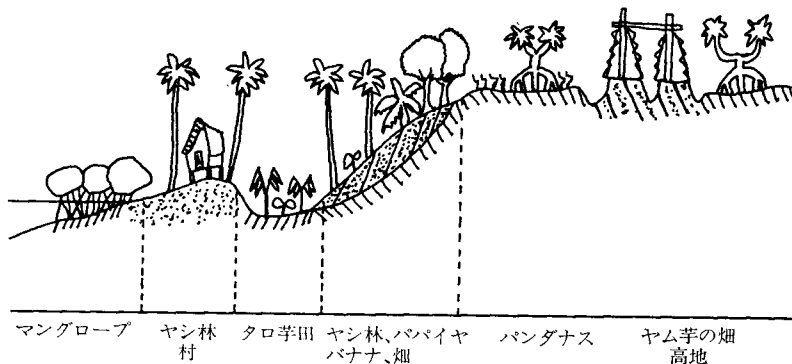
カロリン群島西部にあるヤップ島は、北緯10度、東経138度に位置する環太平洋造山地帯上にある面積216平方キロ、人口4,071人(1966年)の陸島で、大小四つの島で構成されている。

1. 土地利用の概略

現在コプラと高瀬貝がこの島における換金生産物にすぎず、伝統的島民の生計は農耕と漁撈に依存している。植物性食料資源の最も重要なものはタロ芋で、ヤム芋、パンの樹がそれにつづく。他にサト芋、さつまいも、バナナ、パパイヤ、ポイの実、ヤシの実等が食料として栽培されている。⁽²⁾ タロ芋は水田ないしは低い窪地の沼地で栽培されており、その栽培適所は限定されている。タロ芋は、芋を採取した後、その新芽のついた小芋をそのそばに植える(4年位で収穫されるのが通常)。これを絶えずくりかえすから、とくに植えつけ時期や収穫時期というようなものはない。⁽³⁾ ヤム芋は、山の斜面、中央台地に接する山の平地にうねを作り、そこに一定の間隔をおいて植え、成長すると支柱を立てツルをよらせる。ヤム芋は1年に1回だけ成熟して収穫(2~3月)できる。⁽⁴⁾ パンの樹は集落内か畑に植えられ、7~9月にかけて結実し、主食である芋類に対する重要な補充食物となっている。水源の乏しいヤップ島においては、飲料用としてのヤシの実は重要で、人口分布はヤシの樹の多い海岸部にかたよっている。

ヤップ島の土地利用を海岸部から内陸の高地に向かって図解したのが図Iである。

海岸(ダイ)はマングローブが繁り、海岸段丘の上および下に集落(集落内をランヌビナウという)があり、その周囲はヤシ林に囲まれている。その内側や近くの沼地、河川の中流の窪地(ロワイ)

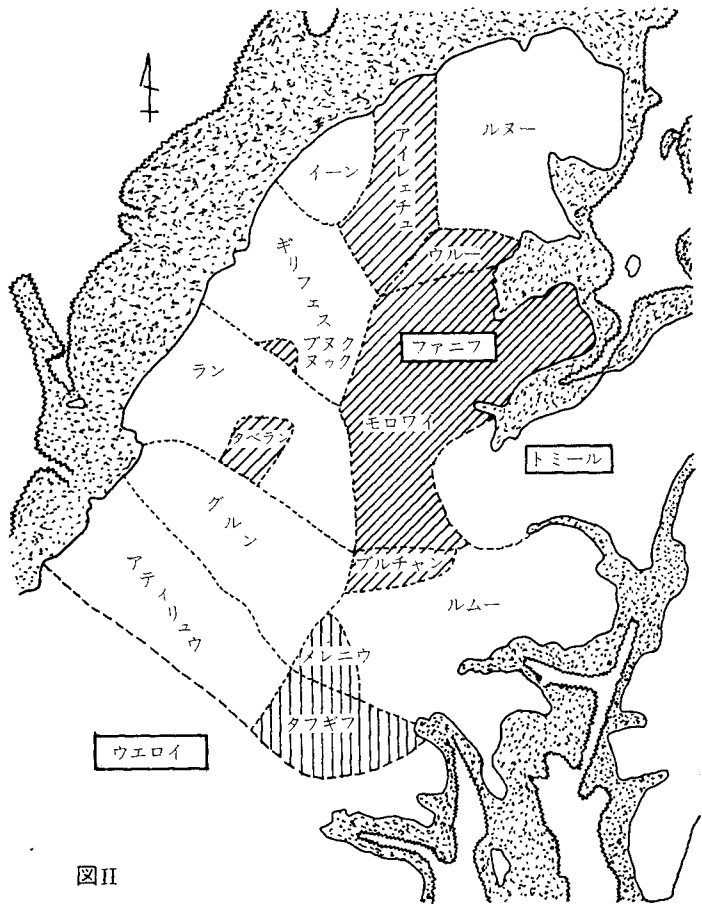


図I (BURRAU 1961:28)

は、芋田(モウト)として開拓、利用されている。山の斜面(フラン)には、びんろう樹、パンの樹、ポイの樹、さらには建材として利用されるタマナの樹などの林(マラゲル)とならんで、畑(ミライ)が高台のステップ状の山(タイド)にかけて作られており、そこにヤム芋が植付けられ、その間にサツマイモ、カボチャ、スイカ、サト-キビ等が雑多に植えられている。

さて、ヤップ島の多くの村(ビナウ)は、一条の谷にそって海岸から内陸部をその領域として

いるので、このような村は、天然資源のあらゆる適所を利用することが可能で、ピナウ（村）それ自体が自給自足経済の単位をなしているといえる。このことが一つの社会・政治単位としての村の独立性の比較的な強固さと関連しているようだ。図Ⅱにファニフ管区の村の領域を示しておく。図のアティリュウ、グルン、ラン、ギリフェス、イーン、ルヌー村等のフィリピン海にのぞむ各村は、海岸から内陸にかけてを、その領域としている。一方斜線の村は下層階級（ミリンガイ）の村で、これらは内陸の天然資源も豊かでない、交通不便な所にある。後述する如く村を構成する父婚的拡大家族（タピナウ）の保有地も、各々あらゆる天然資源の適所を交錯して散在している。



図Ⅱ

一例としてファニフ管区ラン村の土地利用の概略をのべると、この村は海岸段丘の下を埋め立てて、そこに集落地と芋田を作り利用している。集落内（ランヌピナウ）にはヤシ林、びんろう樹、ニッパヤシの沼地、タコの樹等がある。タロ芋田は埋立地内の大きな田と、他に河川の中流域にそって作られている（なお、ラン村の芋田は山の反対側のモロワイ村にも多く散在している）。谷の入口あたりに林（マラゲル）があり、建材としてのタマナの樹、パンの樹、ポイの樹等がある。段丘の後方の斜面（フラン）は、所々が切り開かれ畑（ミライ）として利用され、ヤム芋、サツマイモ、タピオカ、カボチャ、スイカ等の野菜が植えつけられている。また山（タイド）は以前はステップであって、ミライも多くあった（ヤップには焼畑による開拓の慣行はない）。これらのタロ芋田、ヤム芋畑は、多くの筆に分れ、各々の拡大家族（タピナウ）によって保有され、さらに個々の家族成員に使用権が割り当てられている。さらにマラゲル、タイドも個々のタピナウの保有するところとなっている。動物性食料はもっぱら漁撈（フィタ）に依

存しており、イモ類の植つけと栽培が女性によってなされているのに対して、漁撈活動は男性の仕事の最も大切なものの一つである。⁽⁵⁾村の海(マダイ)は定っており、ギリフェス村とグロン村との村境を延長した線内の海がラン村の領海で、海岸の使用権と共に漁場も各タピナウに分割されている。

<補> ヤップ島にて食用食物として栽培されているものの主なものを次に示しておく。⁽⁶⁾

タロ芋。*cyrstosperma chamissonis*, 通常 giant swanp taro と呼ばれているもので、島民はラックとユンユンに大別し、前者は7種、後者は4種、計11種が識別されている。⁽⁷⁾

サト芋。*Colocasia esculenta*, マルと呼ばれ、タロ芋の間に植える。9種分類され、そのうちライと呼ばれるのは *Alocasa macrorhiza*。

ヤム芋。三つに大別され、ドック (*Dioscorea alata*) 15種、ダル (*D. esculenta*) 9種、サーブ (*D. nummularia*) 7種ある。⁽⁸⁾

パンの樹。*Artocarpus altilis*, ソウと呼ばれ、23種ある。

その他バナナは13種、ヤシ(ニュー)は8種、ボイ (*Inocarpus edulis*, tahitian chashnut), さつまいも(カモテ), かぼちゃ(パウ), すいかなどがある。

2. 人口減少

人口学的にみると、ヤップ島は長期に渡って人口減少を続けている一つの事例である。手もとにある資料からひろってみると、ヤップ島の人口は、ミッシェンの報告によると、1898年に7,808人、1902年に7,464人、ドイツ政府の報告にて、1903年7,156人、1905年6,641人、1910年6,328人、1911年6,187人(他に140人のチャモロ)と推算されており、一路減少をたどっている。ドイツ時代の人口は概して推定にもとづくものであるにしても、ヤップ島の著しく減少の状態にあった。日本時代の島勢調査によると、1930年の人口は6,329人で、1925年~29年5年間の平均島民出生死亡率をみると、出生率14.4%、死亡率44.1%で、著しく少産多死の状態を示しており、1930年の人口ピラミットの百分比は、6~14才25.17、14~59才64.03、60才以上9.91で、特に小児階級の小であることがめだつ。これに付加するに、1930年6,329人に対して、1924~1930年間の減少は889人、1919年~1924年は962人で、ミクロネシアにおいて、ヤップのみが減少をしめしているのである。ちなみに1936年5,683人、1937年5,559人の人口を示している。

以上の数値が示すごとく、日本時代においても引き続き絶対的減少を続けていたといえる。これがアメリカ時代になると、1946年2,478人(Useemによる)と最低値になるにいたる。この後は人口減少はとまり、1948年2,625人、1957年3,123人と増加の傾向を示し、1966年4,071人にまで立ちもどりを示している。⁽⁹⁾

かくの如く、最近における増大傾向は別にすると、ヤップ島の人口は、かなりの長期に渡って人口減少を続けていた地区であるが、白人接触以前においての人口を、人口学者 J. H. Underwood は4万人と逆算している。⁽¹⁰⁾ちなみに1957年(人口3,123人)、ダリブピナウ管区の土地調査を行った F. Mahoney ⁽¹¹⁾は、ヤップ人は住宅の石積のプラットホーム(ダイフ)に住むと信じられている家族霊サギスの近くに、可能なかぎり家を建造する習慣があり、その結果石の土台の増加は、住居の移動というよりも、人口の増加を示すものであると仮定し、ダリブピナウ地区には

485の土台があるので、各家族に平均4人の成員がいたとして逆算すると1,640人、つまり170人の現在人口の10倍の住民がいたと推算している。また、D. M. Schneider⁰³は白人接触以前において5万人の推定人口がいたと考えている。この人口減少の要因は人口の最大増加時における反作用、疾病の増加の他に、低い出生率と高い幼児死亡率にも求められよう。Schneiderは、人口が最大に増加した時期より若い女の間を広まった墮胎の慣行が出生率をおとしたと指摘し、若い時代における恋愛の自由と育児に対する責任からの回避が、心理的充足と行動パターンとの統合を構成していた点を、機能的に分析している。

これらの人口問題を社会的側面に関して付言すると、ヤップ島には129の村が存在していたが、そのうち22は現在廃村となっているか、人口ゼロの村である。人口減少の結果、人口に比して土地が多くなり、その使用と居住にかなりの撰択を可能にした。またヤップ島民は比較的大規模な人口に見合った政治・社会体系を発達させていて、数多くの職能が機能していた。今日人口減少の結果、これらの職能と特権は数少ない残留者の手に集中していった結果を示している。同時に土地所有に関して、様々な相続様式を通じて、少数の者に土地が集中化していったことの結果を今日示している。しかし、ヤップ社会における、全体としての社会体系の変化は、あまり大きなものでなくその進歩も急激ではなかった⁰⁴。そして今日でも社会体系のわく組は保持されている。そのメカニズムを解明することが一つの問題となるであろうかと考えられる。

以下、先にのべた土地利用および人口減少の社会的な効果に関する問題をからませて、社会体系の比較的強固な持続性について、ファニフ地区ラン村の事例を中心に触れてみたい。次表は1966年の人口である。

表Ⅱ 1966年人口分布

位階	村	面積 (平方エ ーカー)	人口	人数/1 平方エ ーカー	1973年 タビナ ウ数
3	ルヌー	481.86	39	12.35	1
7	アイレエチュ	97.77	4	24.44	2
3	イー	174.59	31	5.63	6
1	ギリフェス	412.02	55	7.49	11
	ブヌクヌック	62.85	0		0
6	ウル	122.21	26	4.70	4
6	モロワイ	471.38	16	29.46	7
4	ラン	331.71	41	8.09	5
8	タベラン	45.79	0		(1)
4	グロン	579.63	0		0
	ブルチャン	48.88	0		0
4	ルム	331.71	196	1.69	?
	メレニウ	167.60	0		0
3	アティリュウ	586.67	68	8.63	7
5	タフギフ	303.78	0		0
		4,218.05	479	8.81	?

(Underwood 1969)

表Ⅰ 1966年の人口

管 区	人 口	他 島 民
ギルマン	193	(2)
カニフ	227	(2)
ダリアビナウ	321	
ファニフ	479	(11)
ウエロイ	399	(54)
ルル	672	(5)
カギール	545	(5)
トミール	648	(6)
マーブ	399	(11)
ルモン	188	(5)

(Underwood 1969)

3. 階級（サール）

ヤップ島の政治・社会体系を支配しているのは格付け（Ranking）である。ヤップ島には129の村（ビナウ）があり、これはさらに10管区に集合されて、以前は8人の大首長（ピルン）によって統制されていた。つまりルモン及びマップは一部分はトミール、一部分はウギリの大首長の支配下に属していた。⁰⁶各管区の第1位の階級の村の長（ピルン・ユ・ビナウ）が、管区の長をかねる。ヤップ社会では、村（ビナウ）自体に階級（サール）が定っており、全島の村々は8つの階級（(1)ヴルツェ、(2)ウルン、(3)タセパン、(4)マセパン、(5)ドルチック、(6)ミリンガイ・ニ・アロウ、(7)ミリンガイ・ニ・カン、(8)ミリンガイ・ニ・ヤグク）のいずれかに位置づけられる。過去においては、村のサールは必ずしも固定的なものではなく、戦勝の結果昇格し、あるいは戦敗の結果下降せられた。上位5階級はピルン階級で上層階級であり、ミリンガイは下層階級である。⁰⁷

ミリンガイの村は2～5戸の小部落から成り、若干の例外をのぞき海岸より離れた山間にあつて、交通上及び土地利用上不便不良の所にある。今日は廃村になっている場合が多い。このミリンガイに対して責任のあるタビナウ（拡大家族）の長をスオンという。スオンとは「責任がある」という意で、スオンは、それに属するミリンガイを被護し、その生活に対して責任を持つ。これに対してミリンガイはスオンに対して、ある種の個人的奉仕が要求される。例えば道ぶしん、家の屋根ふき、葬式のときの墓穴掘り、棺かつぎ、墓地の管理（ピルン階級の村の墓はミリンガイの村の近くにある。例えばラン村の墓はタベラン村（ミリンガイ・ニ・ヤグク）の者が管理する）その他の雑用である。土器の製作もまたミリンガイの女子の専ら当る処であつた。⁰⁸

さて、後述するごとくスオンの特権は、他の職能・特権と同様に、特定の屋敷地（石の土台—ダイフ—が付属している土地の一面）に付与されており、その屋敷地の移行と共にスオンの特権も新所有者に移る。つまり、厳密にはミリンガイに対する特権は、特定のタビナウの長が保持しているが（例えば、ウラン村のタベラン村の人に対しては、ウラン村の三つのダイフと、グロン村の二つのダイフの持主のタビナウの長がスオンとなっている）、他の村民もスオンの承諾をえて、ミリンガイを使用することが可能である。

ピルン階級にとっては、ミリンガイは不浄（タアイ）とみられており、その所持品に手を触れず、その採取した食物を食べない。ミリンガイは、ピルン階級に出合う時は路傍に停止せねばならず、ピルン階級が坐している前を通行することをしない（村には村人の通る路（オワエ・ネ・ピルン）に対して、ミリンガイ等の不浄のものが歩く路が村の背後にある。これをオワエ・ネ・ミリンガイという）。彼らは櫛をさすことが許されず、漁業及び舞踏を制限され（例えば、タベラン村の人は手綱を使用することが許されず、サムス—先のまがった棒きれ一とブレス—毒草—の使用に限定されている）、4指距以上の大きさの石貨を持つことが許されない等の制限がある。婚姻もピルン階級とミリンガイ階級との間は認められていないが、第5階級（ドルチック）とミリンガイ・ニ・アロウ（アロウ＝自由民の意）との間は例外的に許されている。

ピルン階級とミリンガイ階級の関係は、基本的には土地保有権の関係で、スオンの特権は村それ自体ではなく、特定のタビナウの長に保有されているかのようであるが、はたしてこの関係を土地保有権の線にそってだけで理解できるかどうかは問題である。ミリンガイに対する特権スオ

ン、すなわち「彼の責任」の意の言葉は、ピルンの村人に対する責任とか、両親の子供に対する特権と義務をさす言葉であることを考慮すると、ことによると擬制的親子関係の線からの理解を必要とするであろう。⁹⁹さらにピルン階級とミリンガイ階級との通婚禁止、墓地の管理、葬式における役割、月経・妊娠時における婦人の世話等にその奉仕が要求されていること、特に不浄（タアイ）とみなされている仕事を専ら行うこと、その他ミリンガイに対する慣行の根底に浄・不浄感がうかがえることを考慮すると、いわゆるカースト制のそれとの類比という見方からの分析が必要となるであろう。

かくの如く各村は上層と下層に2大別される階級（サール）に従って位置づけているが、さらに地理的な結束にかかわらず、軍事的にヴァーニ・ピルン（首長又は長老側）とヴァーニ・パカリ（青年側）に2分される。最高位のサールたるヴルツェの村とウルンの村が各々の長になる。つまりヴルツェの村はヴァーニ・ピルン、ウルンの村はヴァーニ・パカリ、その他の階級の村は両派に所属していた。今日では部落内の戦闘はすでに久しく消滅しており、ヴァーニ・ピルン及びヴァーニ・パカリもただその名を留めるにすぎ

ない（しかし、村間の儀礼的祭宴の際にそれがみられるようである）。ちなみにヴルツェの階級の村を位順にあげると、(1)タブ（トミール）、(2)モロウ（ウルル）、(3)ソーラン（ウギルのガチャバル）、(4)ギリフェス（ファニフ）、(5)カニフ（ダリプビナウ）、(6)ナフ（カニファイ）、(7)グロール（ギルマン）の7村、ウルンの村は、(1)バラバット（ウルル）、(2)イリヤップ（ウギルのガチャバル）、(3)メルル（トミール）、(4)ドゥルガン（ウルル）、(5)アノス（ギルマン）、(6)チョル（マップ）、(7)ファル（ルモン）の7村であるという。

ファニフ管区の村のサールは右の通り。

表Ⅲ ファニフ管区の村

ヴルツェ	ギリフェス	ファニフ管区 のピルン
タセバン	アティリュウ	本当はドルチュ ク？
ドルチュク	イー ラン ¹⁰⁰	マセバン？
	グロ ルム ルヌ	ウルンより
	タフギフ	
ミリンガイ・ニ・アロウ		ウル モロワイ
ミリンガイ・ニ・カン		アイレ チュ ブル チャン
ミリンガイ・ニ・ヤグク		タベ ラン ブタク ヌック

4. 村（ビナウ）

ヤップ社会の基本的政治単位は村（ビナウ）である。各ビナウは2つ又はそれ以上の格付けされた区に分れる。これをファニフ管区ではギレツビナウ（またはブクルイ・エ・ビナウ）という。さらに村を2分してバライ・エ・ビナウという。

村には共同の会議所（ペバイ）¹⁰¹、舞踊場（マラル）、魚を分配する石（ラロウ）、月小屋（ダ・バリ）、聖地（タリウ）、男子小屋（ファルウ）、路（オワエ・ネ・ピルンとオワエ・ネ・マリンガイ）等々の共同施設を持つ。大きなギレツビナウはそれ独自のファルウを持つ。

さて、ギレツビナウには各々首長（ピルン、ピルン・ユ・ブクルイ・エ・ビナウ）がおり、このピルンが責任を持つ区域はラナウンと呼ばれる。ピルンはラナウンに住むタビナウ（父婚の拡大家族）の成員に対して責任を持ち、タビナウの者はピルンにすべて相談して行動する。一方、結婚、誕生、葬送等の機会に備される儀礼的な交換（ミティミティ）に際しては、必ず自

分のピルン（ピルン・ウエローム）にその一部を与えねばならない。

村の最高位のギレットピナウのピルンが、村長（ピルン・コ・ピナウ）をかねるが、これらのピルンは、魚・食物・貨幣の儀礼的分配の命令、男子小屋・月小屋・聖地等の共有施設に対する責任、儀礼的交換を供なう祭宴の主備等々の共同活動に対する命令権を持ち、村内のタピナウのものに生産物ないしは奉仕を要求する権限・特権を持っている。これらのピルンの権限はギリウグンという。もし、これらの要求に従がわぬ者があると、ギリウグンを保持するピルンは、その個人財産や樹を侵触したり破壊することができる。さらに追放する権限さえ持っている。場合によっては命令をきかぬ者を他村の者に依頼して殺害させることもできた。

村における職能は各区のピルン・村長の他に、村長の命令をうけて他村との交渉、戦事における指導等に権限を持つピルンのメッセンジャー的機能を有するピルン・コ・マカスがいる。これは Müller 等が戦争村長と表現しているものである⁶⁴。他にピルンに相当するものとして、漁撈活動の指揮をとるピルン・コ・フィタ（漁撈村長）、各ギレットピナウの若者（パカリ）の頭となるラガ・ニ・パカリがいる。また呪師（タメロン）がいる村もある。

これらの職能と特権は、屋敷地に付随している。村内の全ゆる土地は多くの筆に分割されており、その中に屋敷跡・石積の土台（ダイフ）のついている筆と、ついていない筆がある。ヤップ人はこのダイフに住んでいると信じられている家族霊⁶⁵の近くに、可能なかぎり家を再建する。今日大幅に人口が減少した結果、各村を構成するタピナウは二つ以上のダイフを保有していることはまれではないが、人口が最大であった時は、現在残存しているダイフの大部分に家屋がたてられていたとみてよいであろう。この屋敷地（正確にはそれに付随している石積の土台）に位階があり、このダイフに職能と特権が付随しているのである。従って各タピナウの長は、特定のダイフを保有することを通じて、特定の職能を受けつぎ、特権を保持するのである。ピルン等の職能がついている土地はタフェン・エ・ピルンという。各村の最高位のダイフを所有するものが、村長となるのである。かく、ヤップの伝統的社会では、各人は自己の保有する土地の位階に基づいて、村内での地位が定められ、政治的・宗教的職能につく資格を保持するのである。つまり、ヤップ社会では特権・職能は一定の土地（屋敷地）に固定しているといいかえてもよい。ここに社会、政治体系のわく組が比較的強固に保持された要因を見い出すことも可能であろう⁶⁶。

5. ラン村の政治組織

ファニフ管区の第1位の村はギリフェス村（ヴルツェ）であるが、伝承によると、以前はラン村が第1位の村であったという。今の村長ワースより8代前のピルンはガラタパールであった。当時ガラタパールの治めるラン村はヤップ本島の西半分を支配しており、年に一度各村からヤシ縄、真珠貝、ヤム芋などの献納品を受けており、特に石を産出するルモン島からは石柱を買納されていた。このルモンの石は、村第1位の屋敷〈グチャル〉跡やペ・バイの近くにある魚をわける石（ラロウ）に残っている。一方ラン村はヤップ第1の村、トミールのタブ村へ、各ダイフ1個あての小石貨を集めて貢納していた。その時ギリフェス村がラン村に戦争をしかけてきた。当時村の大きさは20～40才の男からなる戦士の数で判断されていたが、ギリフェス村の戦士は200人、ラン村は150人位であった。一度目はラン村が戦勝した。ギリフェス村の首長はトミールの

ダブ村にかけあい、当時一番勢力のあったマー村の援軍をえて再び来襲してき、戦いが起り、その結果ラン村は戦敗し、ラン村の集会所にあった石貨などは持っていかれ、ピルンの屋敷や戦争指揮者の屋敷は破壊されたという。その結果、ギリフェス村が第1位の村となり、ラン村の地位は下降した。(なお、ラン村はもともとはヴァーニ・パカリであったが、戦敗の結果、ヴァーニ・ピルンのギリフェスの仲間になったが、ラン村はその中間にある村(ヤップではここだけ)ということになり、戦争にはヴァーニ・ピルンにつくが、村々間のミティミティ等の儀礼的対立では、ヴァーニ・パカリのオカウ村と一緒にするという、詳細は未調査)。ラン村は一般には第4位に位置づけられているが、村人はギリフェス村につぐ位の村であるという。

ラン村は現在五つ(不在者を含めると七つ)のタビナウ(拡大家族)しか残っていないが、50の石積の屋敷跡(ダイフ)がある。村(ピナウ)は四つの区域(ギレツ・ピナウ)に分かれているが、その位階の順は(1)マテドール(2)フラン(3)アチュロ(4)ゲグループである(なお(1)と(4)、(2)と(3)に2組わけて、バライ・エ・ピナウという。この分け方は、祭儀や集会所の座席などに出てくる)。さて、ピルンに相当する資格が付与されている土地はタフィネピルンというが、ラン村における最高位のダイフは〈グチャル〉(以下く)はダイフ、すなわち屋敷の土台を示す。各ダイフは名前を有する)で、この保有者がマテドールのピルンであると共に村のピルン(ピルン・コ・ピナウ又はピリビシエル(長老)・ネ・ピナウ)である。フランのピルンの特権は〈フラン〉についており、かつこのダイフにはミテシン・コ・ピルン、つまりピルンのメッセンジャーとして他村との干渉および戦争における指揮権を持つ「戦争村長」の職能が付与されていたが、ギリフェス村との戦争の際に破壊されてしまい、しかも〈フラン〉出身の最後の女性がギリフェス村に婚出してしまったので、ピルンの特権は消滅した。しかし、祭宴の際には、フランのラガニパカリ(若者頭)である〈フィティチ〉(第6位)が、その責任をとっている。今日第2位のダイフは〈アプルゴク〉で、マテドールのラガニパカリであると同時に、〈フラン〉にかわったミテシン・コ・ピルン(ないしはピルン・コ・マカス)の屋敷である。第3位〈ガルフ〉にはケグループのピルン及びそのラガニパカリの、第5位〈タエブ〉にはアチュロのラガニパカリの職能が付与されている。アチュロのピルンは〈アチュロ〉が荷になっていたが、〈フラン〉と同様にこの家の女が嫁に行き、ギリフェス村の人の所有するところとなり、ピルンの特権は〈タエブ〉に移った。第5位〈タバウ〉は、スオン・コ・フィタつまりリーフ内の漁撈の指揮者の職能を持つ。これはルオル漁、つまり椰子縄に椰子の葉をさいたものをのれんの如くに垂れ下げたもので20m以上もあるものを、幾つかつないで120m以上もの範囲に互いに魚を囲む、集団漁撈の指揮者であり(ラン村ではマテドールがルオルを保有していた)、かつ獲物の分配者であってピルン・コ・ピナウ、ピルン・コ・マカスと共に村の統治者の一人である。第7位〈フナガル〉はタチブリ・コ・ピルンの職能を持つ。これは村の共有財貨の管財役である。

これらのピルンが、村の政治に携り、祭宴等の場合に榮譽の地位を占め、貨幣・魚の分配の際(例えば、ラン村では大きな魚が取れた場合には必ずスオン・エ・フィタの家〈タエブ〉に持っていく。それはピルン達に分配される)にも優先権を有するのである。なお、ラン村に付属しているミリンガイの村、タバラン村のスオンの特権が付与されているダイフは、〈タエブ〉、〈アプルゴク〉、〈フィティチ〉である。後述する点でもあるが、村内でピルンになる条件は特定の

土地（ダイフ）の所有者であることだけではなく、この外にさらに一定の年齢階級（エグム）に

表Ⅳ ラン村の職能

順位	ダイフ	調査番号	職能・特権	今の所有者
1	〈グチャル〉	⑩	ピルン・コ・ピナウ マテドールのピルン	ワース
2	〈アプルゴク〉	⑳	ピルン・コ・マカス マテドールのラガニバカリ スオン・ナ・ミリンガイ	ギリルン
3	〈ガルフ〉	㉑	ケグルーフのピルン ラガニバカリ	マガブチャン
4	〈タエブ〉	①	アチュロのラガニバカリ スオン・ナ・ミリンガイ アチュロのピルンを引きつぐ	マガブチャン
5	〈タバウ〉	㉓	スオン・エ・フィタ	マガブチャン
6	〈フィティチ〉	㉔	フランのラガニバカリ	ギリフェス村ギメン
7	〈フナガルル〉	㉕	タチブリ・コ・ピルン	ワース
7	〈ブラアウ〉	㉖	タメロン・ニ・ムルル	ギリフェス村ルグモウ
7	〈ワラガノウ〉	㉗	タメロン・ニ・マダイ	マガブチャン
7	〈フィティシグ〉	㉘		アティリュウ村パピルン ワースが管理
7	〈フィティウル〉	㉙		ワース
7	〈フィティアン〉	㉚		ギリフェス村マトマク

進む必要がある。つまり所有するダイフの位階と年齢階級との結合によって、ピナウにおける各個人の位階が成立するのである。ヤップの各村には通常6階級のエグムがあるが、特定の土地を有する特定の年齢の男子が特定のヤグムに属するのである。つまり自己のヤグムが上昇するためには、年齢が進むことと、上級エグムの資格として必要な特定の土地を有することが必要な条

件であるともいえる。このようにヤップ社会では年齢、土地の位階、職能・特権は近接に関連しているのである。

表Ⅳにラン村で最高の年齢階級（タラン）に進むことのできるダイフをあげておく。〈ブラアウ〉はタメロン・ニ・ムルルつまり戦争の呪師、〈パラガノウ〉はタメロン・ニ・マダイつまりリーフ内の魚撈の呪師である。これらの職能を有するものが、村の長老層を形成していたのである。

ラン村の事例にしめされるごとく、伝統的な村の行政組織には、村長以下の政治的宗教的職能が存在し、比較的大規模な人口に見合った政治体系が発達していたといえよう。政治体系内のこれらの各職能とその特権は、格付けされた屋敷地に基底を持つことによって明確な体系を構成している。ところで、ヤップ社会では人口減少の傾向がかなりの長期に渡って続いた結果、今日残った少数の者に職能が集中し、一人で4～5の職能を引き受けている場合もまれではなく、「すべての村人がピルンである」といった現象さえしめされている。これは、財産、特に屋敷地を相続することは、同時にそれに付与されている職能・特権・位階を継承することを意味するという、財産の相続と地位の継承が表裏の関係にある社会のメカニズムと関連している。

6. 土地保有とタバウ

以上みてきた如く村内の個人の地位は、彼が保有する土地（正しくはダイフを有する屋敷地）

の位階に基づいており、従って村内の政治・宗教的職能と保有する土地とは関数関係にある。云いかえれば、ダイフに対する要求は村の政治体系内における地位と特権に対する要求でもある。ところで他方この屋敷地こそが食料資源の保有単位である。つまり、村（ビナウ）の土地はすべて多くの筆（plots）に分かれ、その筆の各々は父系拡大家族（タビナウ）の長によって管財されている。伝統的職能と特権はまさにダイフに付随しているので、これらのダイフに付属するダイフのついていない単なる土地の一画⁶⁹とは区別せねばならない。ヤップ語でビナウというのは、村をさすと共に土地一般をも意味するが、通常は村内の土地をさす語で、タロ芋田、ヤム畑、海、漁場などの特別な一画はふくまれていない。けれども、名前を有し、職能・位階を内包しているダイフを有する屋敷地には、村内のその他の筆、タロ芋田（モウト）、ヤム芋畑（ミライ）、リーフ内の漁場、エリ（石積の追込みで、竹の篠立の追いこみ—ジャガール—と共にダイフに付属する不動産である）、ヤシの樹（ニュー）、森（マラゲル）、山（タイド）などの plots が一つのセットとして付属している。つまり、各々のダイフには、タロ芋、ヤム芋、ヤシの樹、魚、パンの樹等々のあらゆる食料資源の領域に分散しているいくつかの土地の筆が付属しており、ダイフは独立した食料資源保有の単位であるといえることができる。これらの付属するいくつかの筆が、一つのセットとして財産単位を構成し、屋敷地の移行と共に譲渡・相続されていくのである。

今日ヤップ社会は極端な人口減少の結果、タビナウ（拡大家族）は二つ以上の屋敷地を保有していることはまれではない。ここでこの基本的土地保有団体であるタビナウについて触れてみる。タビナウという語は「土地の人」という意で、その意味は特定の土地と結びついている人ということになる。タビナウを居住規定の局面でみると、夫方居住婚で、タビナウの成員は男、その妻、結婚した息子とその妻、未婚の息子と娘、父系的な孫に、他に婚出した娘で構成されている。つまり **patrilocal extended family** といえるのであるが、婚出した娘は生家と婚家の両方のタビナウの成員であって、これらの成員はタビナウの財産に対して意見を云うことができ、財産を相続する資格をもつ。

出目の局面でみると、せまい範囲に限定された **patrilineal lineage** であらう⁶⁹。つまり各人は父系系族の成員権によって、土地保有ないしは使用権が与えられる。タビナウの財産が子供に分けられた場合、時がたつにつれてこれは新しいタビナウになる。しかし、新しいタビナウになっても村内にいるかぎり、もとのタビナウの権限が付与されているダイフ、つまりケンギ・ア・ダイフとの関係は忘れられず、一種の協業集団を構成する。またある男の財産が一つの財産単位として、年長の息子に相続された場合、この年長のものがマタム、つまりタビナウの長として、他の兄弟達およびすべての成員に対して管財人となる。しかし、成員が集団として働くことが不可能であると認められた場合、財産に余りがあるならば、財産を分与し、一つの新しいタビナウになる。このような形で、タビナウの分裂がおこった場合、その結びつきは急速に失われていく。かくて、タビナウそれ自身は自己完結的な集団で、より大きなリネージュを構成する単位をなしているものではない。サーリンズ流に言えば、無頭デセント・ライン型の親族構造をしめしているといってもよいであろう⁶⁹。このように村は相互に関連のないいくつかのタビナウ（**patrilineage = patrilocal extended family**）によって構成され、各々のタビナウは土地保有団体ないし資源使用協業集団である。これらのタビナウを結びつけているものは、村への帰属であるといえよう。

ところで、タビナウの長（マタムないしはプムオン＝the man）は、年長の男である。ヤップ社会では妻と子供を持った若者でさえ、まだほとんど責任をもたない。結婚した若者は父の土地内に父の住宅より少し離れて小さな家屋をつくる（ダイフがある場合にはそこに家屋をつくる。これをダイフ・コ・ピテール＝子供のダイフという）。その際、タロ芋田、ヤム芋、ヤシの樹等の使用権を父から割り当てられる。これは一つの家屋には一つの夫婦しか入れないこと、および息子と父は同じ田・畑の食物を食べることができないことによる。男の本当の責任は40才後半から50才前半になって、タビナウの長を継承するようになって持つようになる。それ以前はタビナウの長達によって構成される会議等の村の公的活動に参加する資格を持たない。人口が多かった時にはタビナウの長の地位は年長者からその年下の兄弟、ついで年長の息子へと移るので、マタムの地位につくのはかなりの年齢になってからであったが、今日人口が減少した結果、マタムになる年齢は多少早くなっている。

タビナウの成員はすべての財産の処分に意見を云うことができるが、現実には所有、分配、処分等の特権はタビナウの長たるマタムに付与されている。だがタビナウの長の地位は財産の所有者というよりは責任者ないしは管財人とみなす方がよく、彼にはタビナウの成員に生活に充合な土地を割り当てることが期待されている。この点は後述するところであるが、タビナウの成員は性と年齢によって格付けされている。このタビナウ内の主なるカテゴリーは年長の男、年長の女、若い男、若い女と子供であって、各カテゴリーの成員は、各々特別に割り当てられた土地の収穫物を、特別な焔、なべで料理したものを食べる。それゆえタビナウの各成員は年齢と性のカテゴリーに応じて、各々のタロ芋田、ヤム畑、ヤシの樹等を必要とするのである。かくしてタビナウの成員は、各々に割り当てられた土地に使用権を有し、マタムはすべての成員に対して管財人として行動するのである。

7. 土地相続の諸様式⁶³

ヤップ人は父系的に意識している人々で、その相続慣習は父から年長の息子へというタビナウの土地保有の永続性を強調し、年下の兄弟ないしは女の相続の可能性は無視されている。このようにのべると単純化することになるが、原則的なヤップ人の相続原理はこのようなものである。つまり長子制と父系相続のメカニズムを通じて、タビナウの財産は保持することが可能になる。

しかしながら、(1) 極端な人口減少の結果、分散した財産が少数の残存者に集中するようになり、基本的には財産は近接に関連している親族集団内の相続を通じて獲得されるのが原則ではあるが、関係のないタビナウへの贈与、交換、売買のプロセスを通じて、もともとの財産に一つのセットとしてのダイフを含む財産、土地の一画、個々の筆等が混入されていった。(2) 個々の樹木、タロ芋田の一画、小さな畑等は婚出したタビナウの女性成員に永久的に分与され、これら婚姻を通じて妻が持って来たすべての財産は、夫側のタビナウの財産の中に混入していく⁶⁴。以上の2点の主なる要因によって、今日ほとんどのタビナウの財産は、二つ以上のダイフ及びタビナウに集合した個々の土地の一画によって構成されたおり、これら全てが一つの単位として、次の年下の兄弟ないしは年長の息子に相続される。一方、女性は系族に男性がいなかった場合以外は完全な財産を相続することはしない。その場合でも女性は財産を管理する能力がないとみられているので、

夫を管財人にする場合が多い。

以上の如く土地相続は父系ラインにそって相続されるのが原則であるが、人口減少の結果、様々な様式を通じて、少数の残留者に土地が集中している。以下にその諸様式にふれてみよう。

④ユウ。これは父、父の兄弟、自己の年長の兄弟からの相続つまり父系相続した、すべての財産と土地の相続様式をさす。これには祖先からのタビナウに相続されてきた全ての土地に、前世代に婚入した女性からの財産が加えられている。多くの土地はこの様式で相続される。ところで、これと関連するのが名付けの慣習である。ヤップでは子供に上位世代の人の名前をつけるのが慣習である。その際その先祖の持っていた土地のことを考慮してつける。例えばA（それは父の父、父の父の兄弟でもよい）から相続した土地があった場合、息子にAという名をつけ、いずれこの土地を子供Aに分与する予定にする。一例をあげれば、ラン村のワースは長男に自分の父の名イリボをつけ、次男に父の兄弟の名ケンをつけた。ワースは父から相続した土地はイリボに、父方オザからえた土地はケンに与える予定にしているという^例。

⑤リヤガル。男の兄弟がいないという事実にもとずいて、女の成員によって相続された土地をさす。この土地はこの女を経て彼女の息子に受けつがれ、その父からきた土地に混入される。この様式による相続は多くなる傾向があり、一つないし二つ以上のダイフをふくんでいる場合もある。このように女性がダイフを相続することを特にプムオン・ヌ・ツフェン（女が家のプムオンになるの意）という。だが女性はダイフに付随する責任（例えば貨幣の支払い等）をとることが不可能なので、夫をその管財人にする場合が多い。なお、配偶者の系統に男性成員がいない場合をのぞいて、配偶者相互に土地を相続することはない。この夫から妻への移向はツフェン・ヌ・マブオル（＝夫婦）という。リヤガルの場合でも名付けの習慣と関連している場合がある。一例をしめすと、ラン村のフヌオは父の母の父フヌオニガより土地を次の事情でえた。フヌオの父の母はフヌオニガの娘でダリピビナウに嫁に行き、フヌオの父マルタモを産んだ。この女には兄弟がいなかったため、その父フヌオニガは娘の息子マルタモの息子にフヌオという自分の名をつけて、マルタモとその息子に土地を与えたという。これは婚出した女を通じて、夫方に土地が移行する一つの例である。

⑥ギリウギン。他のタビナウに婚出した娘は、子供が産れた後に小さな芋田、パンの樹、小さな土地の一画などが与えられる。これら妻が生家より婚家にもってきた土地をギリウギンという。前のリヤガルもギリウギンのカテゴリーに入れてもよい。この土地はいずれはその女の子の財産に組入られる。だが離婚（ケチュウ）の場合は生家に持ってかえる。なお、名付けの際に女も土地と関連する先祖の名前がつけられるが、女は嫁に行った先で土地をさがす（バイ・タフェン・エ・ワイ）といい、婚出先で土地を割り当てられ、自己の田・畑に使用権を獲得するので、娘は婚家で土地をレグ（鉤る）するという。

⑦スゥース。乳房の意で、母の土地（正しくは母を通じての土地）を相続することをさす。つまりリヤガル、ギリウギンを相続することである。父の母の土地を相続する場合にも使われる。ヤップ人の考えによると母の土地は娘にやることにしているが、ダイフ、男のたべる芋をつくる田・畑は息子がとるものだという。

⑧イレン・ア・マガル。これはあるタビナウから関係のない個人へ、死亡した成員との個人的

なつながりを通じて贈与された土地・財産をさす。年をとった老人に対して、個人的に日頃食物や他の日用品を与えて世話をしていた人は、死後彼の財産の一部に対し要求する権限を持ち、この要求は一般に認められており、死者の関係者は社会的な批判をさけて、土地を与えねばならぬとみている。例えば離婚した母に対して、子供は個人的に食物や贈物を持って行って、子供としての役割をはたし、この関係で死後母から財産をえることも可能である。養子の子供も時々実父母に贈物をし、その実父母との関係を持続させることによって、養子は相続・継承に関して失った地位を再びえることができる。特に実父がその系族の最後の成員である場合は、他の関係者に優先して要求権を保持する。逆にヤップでは子供は両親の老後の世話をすべきであるという観念が強く、長男といえどもこの親に対する義務をはたさないと、土地を相続できなくなる。従って土地を必要とする者は、兄弟姉妹競って親の世話をするものだという。

⑦シリエク。交換、タビナウの土地をまとめようとする傾向があるので、土地の交換もよくみられる。特に他村にある土地は、他村民が自村に持っている土地とシリエクすることが多い。

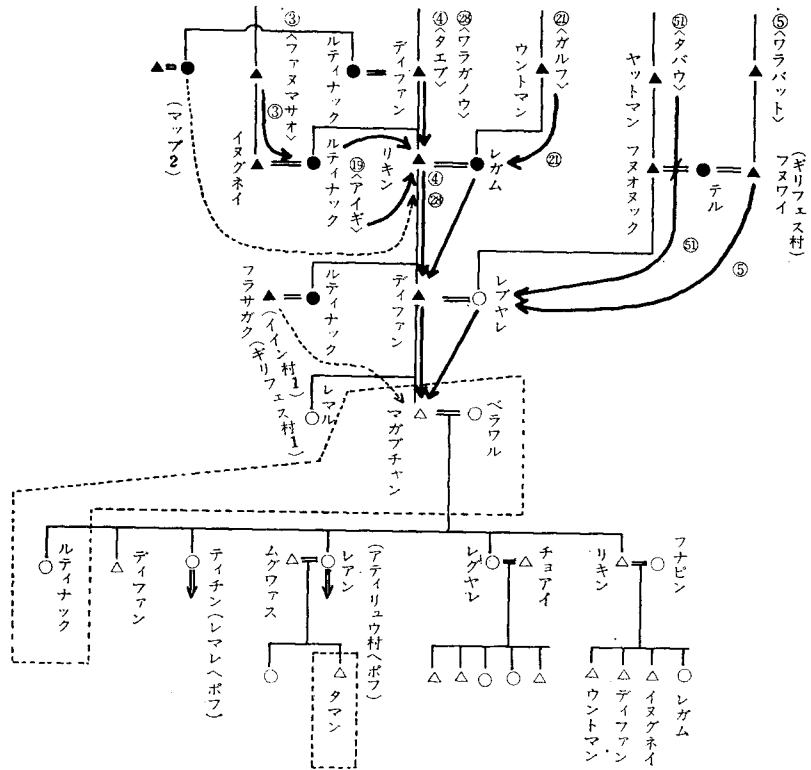
以上の他に借用（コグニン）売買もあるが、以下具体的に今日いかなる様式を通じて少数の残留者に土地が集中しているかを、ラン村の事例で検討しよう。なお、ここに、ダリプピナウの土地制度を調査した F. Mahoney のデータをあげておく。ダリプピナウ管区には1957年当時47のタビナウに170人の人が住んでいる。住民によると53人のタビナウの長がおり、その中12人は女であるという。ヤップにいない4をのぞき、残り49のタビナウは、統計1,287筆からなる158の財産 (tabinaw estates) を保有している。この筆には2,689のタロ田、2,127の畑、40の漁場、177の stone fish weir sites と6,673のヤシの樹が付随している（このうちタロ芋田の20%、ヤム芋畑の60%が使用されている）。485のダイフがある。一人のタビナウの長が保有する財産の数は1から9で、一人のタビナウの長は平均四つの財産を保有し、各財産には平均八つの筆がついている。158の財産 (tabinaw estates) の中74は父系相続、44は母の系族から、15は配偶者より、25は関係ない者からえた。

8. ラン村の土地所有・相続様式

今日、ラン村の人口は男12、女8計20人でワース、マガブチャン、フヌオ、ギリルン、バロイを長とする五つのタビナウがある。その他にデフロウ、ガラガモウの2人が不在であるがタビナウの財産の所有者に加わる。村内（ランヌビナウ）の土地は50のダイフ付きの屋敷地、39のダイフのない筆、98筆のタロ芋田にわかれている（地図参照）。ランヌビナウ外の村の領域にある畑、山、およびラン村の領域外に散在する土地、田に関しては未調査（表V・地図）。

①**マガブチャンの場合**（系図I）。現在マガブチャンは妻ベラワル、学校にかよっている四女儿ティナク、アティリュウ村にポフ（養子）に出した二女レアンの子タマンと住んでいる。（通常養子（ポフ）した子供に実父母が関係することはよくないとされているが、この場合は、話し合いの結果である）。長男リキンはノースファニフスクールの先生をしており、コロニアに住んでいるが、いずれは近くに家をつくる予定。二男はハワイに留学中。長女レグアレはギリルンの息子チョアイと結婚し、地図の⑩（以下の③④等は地図上に記入した土地の一面を示す）に家屋を建てているが、仕事の関係でコロニアの近くのケン村に土地を借りて住んでいる。二女レアンはアテ

イリウ村に養子に出
してあり、三女チ
チンもマガブチャ
ンの姉レマルへ養
子に行っている。
〈ファヌマサオ〉
③に家屋が建て
ているが、マガ
ブチャンはワース
と共に⑩にフェル
（舟小屋）を建
て、そこに寝とまり
している。ラン村
内に七つのダイフ
を持っている。（以
下表Ⅴ、系図Ⅰを
参照）。〈タエ
ブ〉④、〈ワラガ
ノウ〉②⑨は父系
相続（ユウ）した
もので〈タエブ〉
にはアチュロの
ピルン及びラガ
ニパカリの特権が
付属している。〈
ファヌマサオ〉③
は現在マガブチャ
ンの住



系図Ⅰ マガブチャン

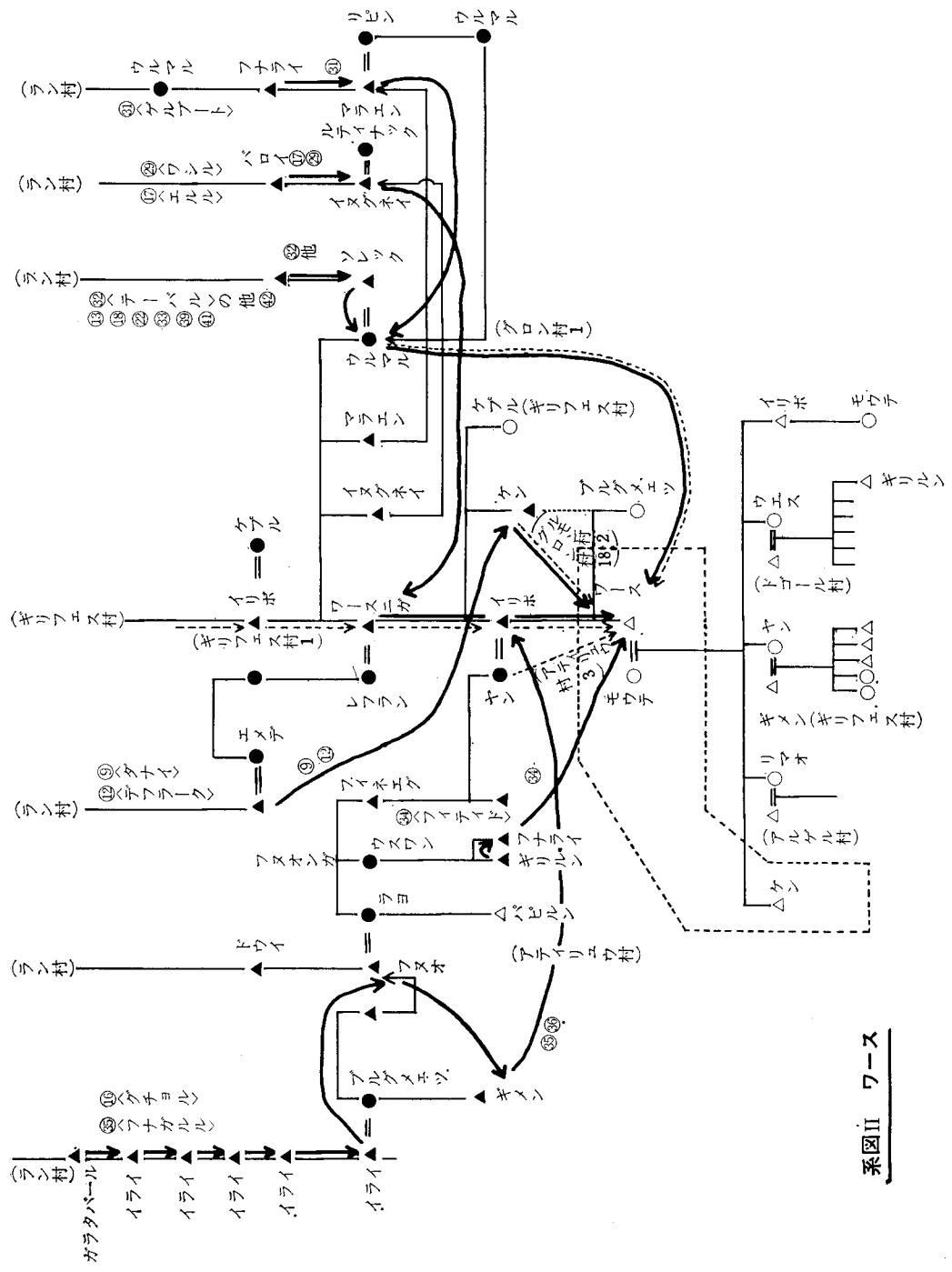
宅があるダイフであるが、父の父の姉妹ルティナックの婚出先のダイフで、そこに子供がいなかったの妻の兄弟リキンが相続したもので、婚出した女性を通じてえたダイフである。〈ガルフ〉②は父の母レガムの実家で、彼女に兄弟がいなかったの、レガムがもらい、ついで父に受けつがれたスースである。なおこのダイフにはケグルフのピルンの職能がついている。〈タバウ〉⑥はスオン・エ・フィタの職能がついているが、母（レグヤレ）の父フヌオヌックがレグヤレが子供のときに死に、レグヤレは祖父の世話をしている、彼女がディファンと結婚した後はリキンが世話をした。それでレグヤレの子マガブチャンのためにリキンがもらった。〈ワラバット〉⑥は母がその母テルが離婚した後も世話をし、その関係でテルと夫からこのダイフをもらい、そこに自分の炊事小屋を作った。母のイレアマガルである。〈アイギ〉⑩はギリフェス村生でイギン村に婚出した子供のない老婆を世話したリキンのイレアマガルである。以上マガブチャンはウラン村内に七つのダイフを保有しており、その様式は男系を通じて2、婚出した女の夫より1、婚入した女を通じて3、その他1である。さらにマガブチャンは他村に、祖父リキンがその母の妹夫婦を世話してえたイレアマガルとしてマップ島にある二つのダイフ、マガブチャンが父の姉

妹の夫からイレンマガルとしてえたイイン村，ルヌー村に各1の，計4のダイフを他村に保有している。その他ウラン村内にタロ芋田12，筆6を保有している。そしてマガブチャンはケグルーフのピルン・ラガニパカリ，アチュロのピルン・ラガニパカリ，スオン・エ・フィタの職能を保持している。

②ワースの場合（系図Ⅱ）。ワースはラン村の最年長の男で，かつ村長（ピルン・コ・ビナウ）である。ワースの妻は病気でコロニアにおり，ワースはコロニアと村をいったりきたりしている。長男イリボは一度結婚したが現在神父としてコロニアの教会にいる。3人の娘はドゴール村（ウエロイ），ギリフェス村，アルゲル村（ダリプビナウ）に各々嫁に行っている。二男ケンには学校に行っており，コロニアの兄の所に下宿していて，週末に村に帰ってくる。ワースはラン村に16のダイフを保有しているが，もともとワースの系統はギリフェス村であった。祖父ワースニガの時にラン村に養子に行った兄イヌグネイのあとを相続し移住してきた。〈エルル〉①⑦は〈ワシル〉②⑨と共にオワスニガがイヌグネイから相続したダイフで，ここに家屋を建てている。〈ワシル〉はタシバ・ヌ・グチョルといって村第1位のダイフ〈グチョル〉の雑用役のダイフ。〈ゲルブート〉⑩⑪，〈テールバル〉⑫⑬，〈フィルウル〉⑭⑮，〈アイグ〉⑯⑰，〈ガルフ〉⑱⑲，〈ラネゲルブート〉⑳㉑，〈フィティアン〉㉒㉓，〈ビレウチュブ〉⑳㉔，〈ルードゥ〉㉕㉖の9のダイフは父の父の姉妹ウルマルよりワースがもらったものである。祖父ワースニガの兄弟マラエンはラン村のフナライ〈ケルブート〉㉗㉘に養子に行った。マラエンの妻リピンに一人の女のつれ子がいた。フナライはその娘にウルマルという名をつけて，オワスニガ・マラエン・イヌグネイの姉妹とした。ウルマルはソレック〈テールバル〉⑳㉙に嫁に行ったが子供がなかった。そこで彼女が年をとった時にワースが世話し，その結果ソレックの持っていた土地をすべてもらった。オワスのイレンアマガルであるが，婚出した女の夫よりえた財産ということになる。なおウルマルからは他にグロン村のダイフを一つもらった。

〈デフラーク〉⑳㉚と〈ダナイ〉㉛㉜は父の兄弟ケンから相続したもの。ケンの母方の関係者にフヌオニガがいた。彼はケンを好み，ケンも彼の世話をした。つまりケンのイレンアマガルである。オワスはケンの老後の世話をし，ケンの土地をすべて相続した。オワスはこの土地を二男ケンにやるつもりでいる。なおこのケンはグロン村の最後の人であって，グロン村に18のダイフを持っていたが，これらもワースの保有するところとなっている。

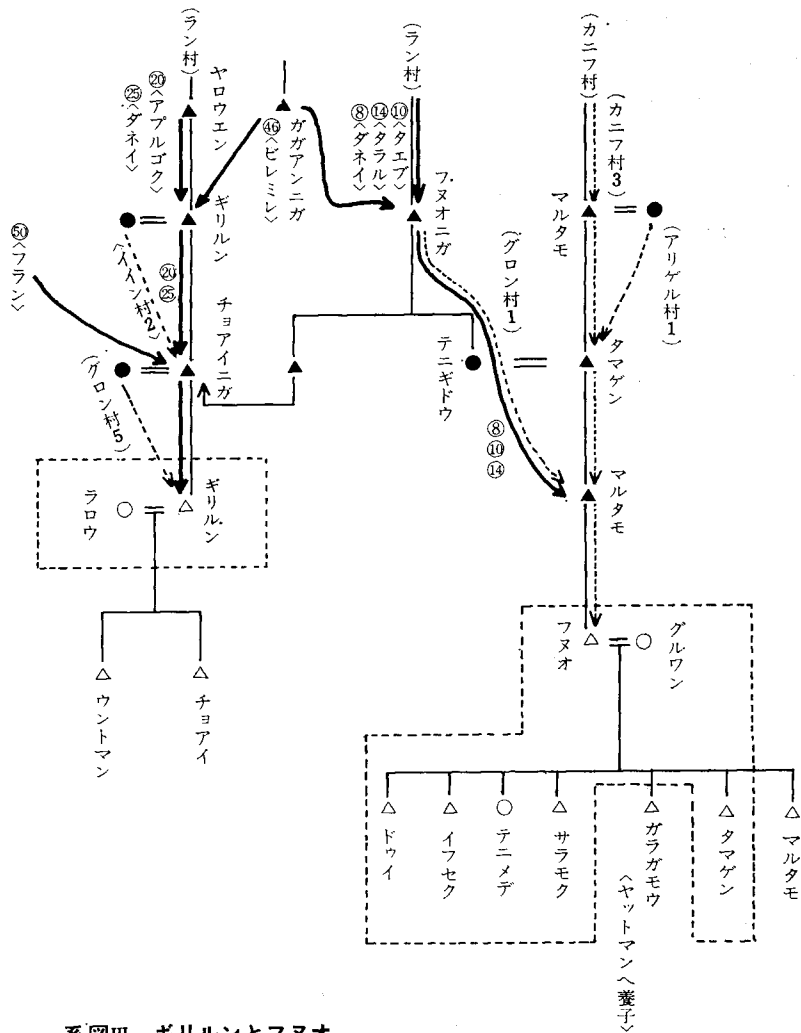
〈グチョル〉⑳㉝はラン村の第1位のダイフでデフラークのピルンであると共に村長（ピルン・コ・ビナウ）の職能と特権を有する。8代前のピルン，ガラタパールまでのラン村のピルンはギリフェス管区の長であったが，ギリフェス村との戦争の結果，戦敗しガラタパールはタブ村で殺された。以来ピルンの名はイライと変名し7～3代前まで続いた。ついでラン村のドゥイの所に養子にきたフヌオニガが4代前のピルンに選ばれた。その後イレイの妻ブルグメッツの養子ギメンがピルンを継いだ。このブルグメッツとワースの父イリボの間で，イリボの子供が産れたら養子にする約束があった。ところが産れた子は女であったので，ブルグメッツは自分の名前だけをあたえて，イリボに土地を相続させることにした。これがオワスの妹ブルグメッツである。なおイリボはブルグメッツの老後の世話をした。この様式はイレンアマガルである。また同時に〈フナガルル〉㉞㉟ももらったが，このダイフはギリフェスとの戦いで〈グチョル〉が破壊された後，



系図II ワース

ビルンが住んでいたところでイラネとブルグメッツもすんでいた。ここはもともとは村の財貨の管理役タチブリ・ユ・ビルンの職能を持っていた。

〈フィティシド〉
 ⑭の相続様式は変わっていて、兄弟「ワラッグ（兄弟）」で相続する土地で、タフェンネワラッグという。オワスは母の父の姉妹の子から相続し、この土地は娘ウエスの子供ギリルンにやる予定にしている。この種の相続はヤップ人はガノン（母系 sib）にそつての土地相続であるというが、この種の



系図Ⅲ ギリルンとフヌオ

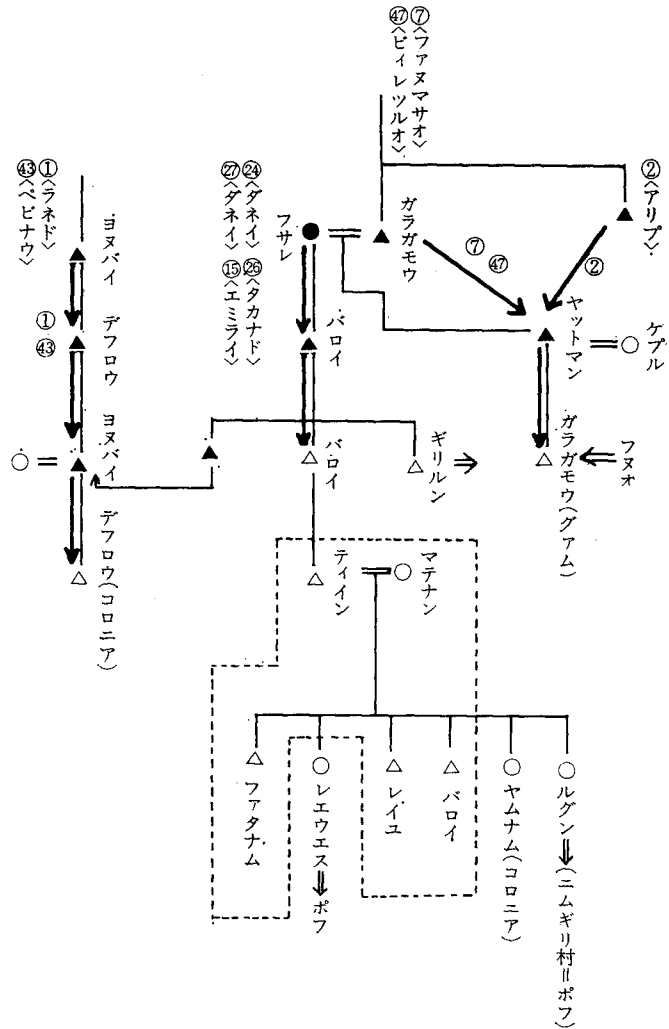
様式はヤップのあちこちにみられる。トミールのアリブ家、ウルルのウアイ家、ガチャバルのヴルオル家、オチャラブのアリヴァン家等の大酋長の家筋にみられると報告され、母系相続であるとされているが、未調査。

ワースはウラン村に16のダイフ（その相続様式は父系相続2，婚出した女の夫9，イレンアマガル4，他1である），タロ芋田30，筆17を保有しており，他に前述のグロン村に19，父系相続でギリフェス村に1，ケンの妻の土地をルモンに2，母の土地をアティリュウ村に3の計25のダイフを他村に保有している。

⑭ギリルンとフヌオの場合（系図Ⅲ），フヌオの父マルタモからみればギリルンの父チョアイは、養子に行ったとはいえ母の兄弟にあたる。これは名称上ワラッグ（「兄弟」）のカテゴリーに入り、このワラッグの子供同志はファカ・ワラッグという。この関係でフヌオはギリルンを「兄」とみなし、田・畑の使用・漁撈等における活動等の様々な生活の局面において、二つのタビナウは協力的に行動している。これは一種の資源使用協業集団といえよう。ギリルンの二人の息子ウントマンとチョアイは各々㉔と㉓に家を建てているが、仕事の関係でコロニアにいる。フヌオの

長男はハワイに留学中、三男ガラガモウはヤットマンへ養子に行っているがゲームにいる。現在妻と5人の子供と住んでいる。

ギリルンの所有する〈アプルゴク〉⑳と〈ダネイ〉㉕は父系相続したもの。〈アプルゴク〉はゲグルーフのラガニバカリ及びピルン・コ・マカスの職能・特権が付与されており、またファルーを管理している。〈フラン〉⑥はギリルンの父チャイニガのイレンアマガルで、チャイニガの親族関係者にあたるウルルのリオンよりもらった土

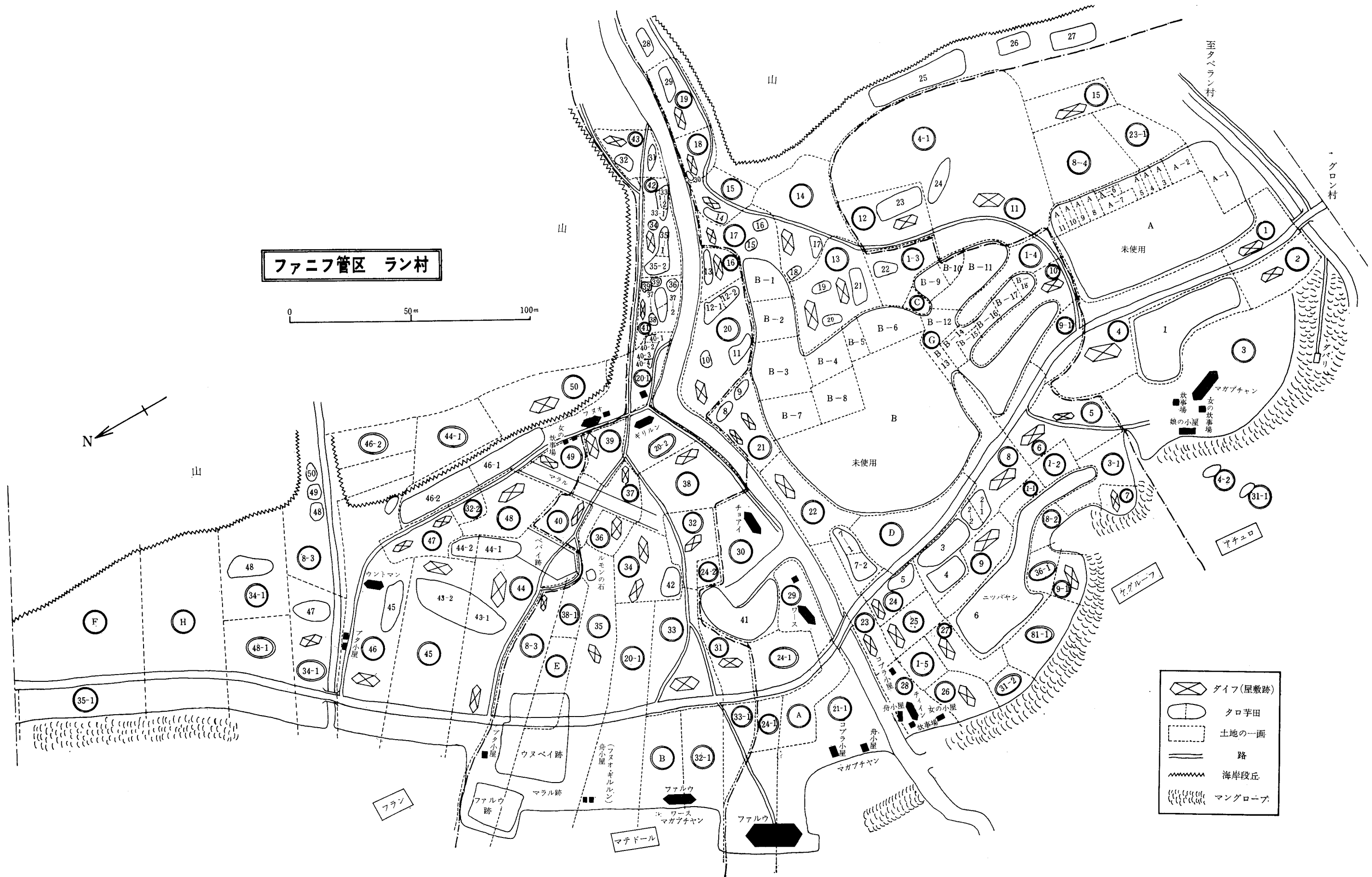
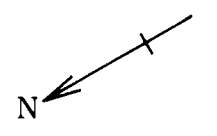
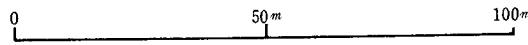


系図Ⅳ パロイ、デフロウ、ガラガモウ

地で、リオンの母が〈フラン〉出の女であったという。フヌオはこの〈フラン〉の土地を切開いて家屋を建て住んでいるが、フヌオの祖父はももとはカニフ村の人で、父マルタモもカニフ村生れであった。フヌオが保有している〈ダネイ〉⑧、〈タエブ〉⑩、〈タラル〉⑭は、マルタモがその母の父フヌオニガより受けついだものである。マルタモの母テニギドウは一人娘であったので、フヌオニガはマルタモの息子に自分の名フヌオを与え、土地を渡した。父の母より相続したのでスゥースである。〈ピレミレ〉⑮の相続様式は異っている。以前ここにガガアンニガ(ギリルンニガのワラッグ)が住んでいたが、その後フヌオニガとギリルンニガが受けつぎ、ついでチャイとマルタモ→ギリルンとフヌオというように兄弟(ワラッグ)で一緒に相続(フルプルーイ)されてきた。これもタフィネワラッグという。以上フヌオとギリルンはラン村に計7のダイフ及び10の筆、18のタロ芋田を保有している。その他フヌオはフヌオニガよりえたダイフをグロン村に1、父系相続してカニフ村に3、及び父の父の母の生家のダイフをアリゲル村に1もっている。ギリルンは母の生家のダイフをグロン村に5、父の母よりのをイーン村に2持つ。

④パロイ、デフロウ・ガラガモウの場合(系図Ⅳ)。パロイ、デフロウ、ガラガモウさらにギ

ファニフ管区 ラン村



リルンとの関係は系図Ⅳに示した。デフロウはコロニアに、ガラガモウはグァムにおり、村に家屋を持っていない。パロイはピルンにあたるマガブチャンと争って、村から追放され、息子ティイン夫婦と3人の子供のみが村にいる。デフロウは〈ラネド〉①、〈ペビナウ〉⑬の二つのダイフ及び筆5、タロ芋田1を父系相続で保有している。ガラガモウは〈ファヌマサオ〉⑦、〈ビイレツルオ〉⑭、〈アリブ〉②の三つのダイフと筆1、タロ芋田1を父系相続で持つ。パロイの父は誰かわからぬ。フサレより〈ダネイ〉⑮、〈タカナド〉⑯、〈ダネイ〉⑰、〈エミライ〉⑱の4つのダイフ、筆2、タネ芋田2を相続している。ほかにワースより〈ダネイ〉⑲をもらって（アユウ）いる。

⑤他村者の所有となるダイフの場合。ラン村内の50のダイフのうち、40のダイフはラン村に成員権を有するものによって保有されている。ラン村の人が他村にダイフを持っている如く、残りの10のダイフは他村の人によって保有されている。〈ブラアウ〉⑳、〈アチュロ〉㉑、〈ダネイ〉㉒、〈フィティアン〉㉓はラン村から婚出した女に兄弟がなく、リヤガルとしてその女に受けつがれ、ついで息子に相続されたもの。〈フィティシグ〉㉔、〈ミス〉㉕、〈 〉㉖はイレンアマガルとして贈与されたもの。〈フィティアン〉㉗、〈フィティエッチ〉㉘、〈 〉㉙は古くから父系相続で他村の者が相続していたダイフである。

なお、〈アチュロ〉㉑はアチュロのピルンの職能を有していたが、今はマガブチャンの〈タエブ〉に移っている。〈フィティチ〉㉒はフランのラガニバカリ、〈バレアウ〉㉓はタメロンニムルルのダイフである。また〈フィティアン〉㉔はプルプルイ（友達）の関係で、〈フィティシグ〉㉕は所有者パピルンは母の父の姉妹の息子で「トゥットゥ（祖父）」にあたる関係で、ワースがアイウェグ（管理）している。なおダイフのつかない土地の一画で、㉖～㉙は他村の者の所有地となっているが、これらはイレンアマガル、婚出した女のギリウギン等の様式で移行したものである。

以上、ラン村には50のダイフが存在し、そのうち40はラン村の人が、残り10はギリフェス村、アティリュウ村等の他村の人の保有するところとなっている。ダイフのつかない筆は56あり、その中39はいずれかのダイフに付属したもので、5は他村のダイフに付属しており、残り3は交換したもの。ラン村の人所有のダイフ40の相続様式は、父系相続12、婚入した女を通じて10、婚出した女の夫より11、他人からのイレンアマガル6、その他2となっている（表Ⅵ）。

表V ラン村の土地所有 (地図参照)

調査番号・ダイフ	附属する土地のplot	タロ芋田	持主	相続様式	職能特権
④ <タエブ>	4-1, 4-2	A-4, A-7 A-11, B-11 2-4, 40-2	マガブチャン	FFF→FF→F→	アチュロのビルン・ラガニバカリ, スオン・ナ・ミリ ンガイ
④⑤ <ワラガノウ>	48-1		〃	〃	タメロン・ニ・マ ダイ
③ <ファヌマサオ>	3-1		〃	FFZH→FF→F→	現在の宅地
②① <ガルフ>	21-1	B-7, 8, 8	〃	FFWF→F→	ケグルーフのビル ン・ラガニバカリ
③⑧ <タバウ>		B-8	〃	MFF→M→	スオン・エ・フィ タ
⑤ <ワラバット>			〃	MMH→M→	
⑩⑨ <アイギ>		28-3 29-1	〃	→FF→F	
⑩⑦ <ワシル>		15-1	ワース	FFb→FF→F→	タシバ・ヌ・グチ ョル
②⑨ <エルル>	29-1	25, 41, 48	〃	〃	
③② <テール>	32-1, 32-2		〃	FFZH→	
⑩⑧ <フィルウル>		20, 19, 21 B-4, B-6	〃	〃	
⑩⑥ <アイグ>		30	〃	〃	
②② <ガルフ>		7-1	〃	〃	
③⑤ <ラネゲルブート>			〃	〃	
③⑨ <フィティアン>			〃	〃	
④① <ビレウチョブ>		37-1, 38	〃	〃	
④② <ルードウ>		32-1, 34	〃	〃	
③① <ゲリブート>	31-1, 31-2 31-3	A-6 35-2	〃	FFZF→FFZ→	
⑩⑫ <デフラーグ>		23	〃	FFMZH→FB→	
⑨ <ダナイ>	9-1	2-2, 5, 13-17, A-2	〃	〃	
⑩⑬ <グチャル>		12-2, B-2 13	〃	イレンアマガル	ケグルーフのビル ン, ビルン・コ・ ビナウ
③⑤ <フナガルル>	35-1, 35-2	B-15, B-12 40-1, 40-3 B-13	〃	〃	タチブリ・コ・ピ ルン
③④ <フィティシド>	34-1	42	〃	〃	
②⑩ <アプルゴク>	20-1, 20-2	10, 11, 12-1 36, B-5, B- 3, A-5, 50, 51	ギリルン	FFF→FF→F	ビルン・コ・マカ ス, マテドールの ラガニバカリ
②⑤ <ダネイ>			〃	〃	
⑤⑩ <フラン>	50-1		〃	イレンアマガル	
⑧ <ダネイ>	8-1, 8-2 8-3, 8-4	2-1, 49 B-18, B-19	フヌオ	FMF→MF→F→	
⑩⑩ <タエブ>			〃	〃	
⑩④ <タラル>		15-2, 16, B- 1, 17, 18	〃	FF→F→	
④⑥ <ビレミレ>	46-1, 46-2	45, B-9	フヌオと ギリルン	〃	
① <ラネド>	1-1, 1-2 1-3, 1-4 1-5	22, 10, A-1	デフロウ	FF→F→	
④③ <ペビナウ>		32	〃	〃	

調査番号・ダイフ	附属する土地のplot	タロ芋田	持主	相続様式	機能特権
① <フアマサオ>	7-1	A-10, 46-2	ガラガモウ	FFB-F→	
④⑩ <ビレツルオ>					
② <アリブ>			〃	FM-F→	
②④ <ダネイ>	24-1, 24-2	4, B-16	パロイ	FM-F→	
②⑥ <タカナド>			〃		
②⑦ <ダネイ>			〃		
①⑤ <エミライ>		26, 27	〃		
②⑧ <ダネイ>			〃	オクスより贈与	
④④ <ブラアウ>	44-1	44-1, 37-2 43-1	ギリフェス村 ルグモウ	MF-M→	タメロンニムルル
⑤ <アチュロ>			〃ギリトマン	FMF-FM→F→	
②⑨ <ダネイ>	23-1	7-2	フラワース の妻	→FF-F→	
③⑦ <フィティアン>		31	ギリフェス村 フナファル	アティリウ村の ヤットマンの母	
③⑥ <フィティシグ>			アティリウ村 バビルン	→FZH→F→	ワースが管理
①① <ミス>			ギリフェス村 ケニメデ	インシアマガル	
④⑨ < >			アティリウ村 ポアン	〃	フヌオとギリルン が管理
④⑩ <フィティアン>			アティリウ村 マトコク	FF-F	オクスが管理
④⑤ <フィテエチ>		35-1, 40-4 46-1, 44-2 43-2	ギリフェス村 ギメン	〃	フランのラガニバ カリ
③⑩ < >			アティリウ村 バビルン ントルク	〃	チョアイの家があ る
	Ⓐ		ワース	フヌオとシリエク (交換)	
	Ⓑ		ワース	アティックウ村 マトコクとシリエク	
	Ⓒ		マガブチャン	ワースニガガリ キンにあげた土地	
	Ⓓ		イイン村 マゲマオ	FF-F→	パロイが管理
	Ⓔ		ギリフェス村 のレモオン	イレンアマガル	ギリフェス村の ダイフにつく
	Ⓕ		ギリフェス村 ルグン	FF→F	ギリフェス村の ダイフにつく
	Ⓖ		ギリフェス村 ギメン	MF→M→	
	Ⓗ		ギリフェス村 ギリトマン	MF→M→	ギリフェス村の ダイフにつく

表Ⅶ ラン村の〈ダイフ〉の相続様式

相 続 様 式	所 有 者							計	他村者所有の ダイフの移行 様 式
	ワ 1 ス	マ ガ ブ チ ャ ン	フ ヌ オ	ギ リ ル ン	バ ロ イ	デ フ ロ ウ	カ ラ ガ モ ウ		
男 系	2 (20)	2	(3)	2		2	3	11	
婚入した女から	5	3	(3)	(7)	4			10	
婚出した女の夫から	9	1						11	4
イレンアマガル	4	1 (4)		1				6	3
そ の 他	1			1				2	3
計	16 (25)	7 (4)	3 (5)	4 (7)	2	2	3	40	10

9. 性と年齢によるカテゴリー

ヤップ社会の主要な価値はprestigeにおかれている。あらゆる社会分野に渡って位付け(Ranking)の体系が貫徹している⁽⁴⁾。村内では各タビナウがそれが保有する土地の位階に基づいて位付けされ、村それ自体はピルン階層とミリングイ階層に二分される階級(サール)の中に位置づけられているのである。さらに家族内においても性と年齢による区分にそって、父は母に、母は子供に、年長の兄弟姉妹は年下の兄弟姉妹に対して優越している。つまり年長の男・女は年下のものに対して優越した地位を家族内において保有している。タビナウの最年長の男がプムオン又はマタムとして、彼だけがタビナウの外に対してのスポークスマンになれるのであり、村内の政治に責任を持ちえるのである。村内においては年下の者に尊敬の念をともなった行動が期待されている。

この家族内の格付けは年長の男、年長の女、若い男、若い娘という基本的なカテゴリーに基礎づけられている。特にこのカテゴリーは食物の調理、作物の植付け・収穫の慣行に顕現している。若い男、若い女、年長の男、年長の女と子供は各々別々の田・畑で作られた作物を、別々の畑、なべて調理して、別々に食事するのである。つまりカテゴリーを別にするものは同じ田畑、畑、ナベの食物を食べない。従って各家族にはその成員構造に従って、各成員に田畑が各々割り当てられ、各々別々の炊事場、なべが存在しているのである。

ウラン村における年齢と性によるカテゴリーの名称は次の通りである。これをヤガレネギリという⁽⁴⁾。

男女とも子供は田、畑に入ることは許されず、母親と一緒に食事をしている。女性はブリエルの時代は母親と一緒に共住し、食事を共にしているが、初潮を境にしてルゴードになる。月経はタル、バル、

男	
ビテール	子供
ガバルバル	16~18才より
フナヤガル	21~23才より
ルクウナウグイ	40代後半~50代前半より
ピリビシエル	老人
女	
ブリエル	子供
ルゴード	初潮以後
ルカンアロウ	出産以後
プエルオル	子供を産めなくなつて以後
ラバシエリ	老 婆

表Ⅶ ラン村のヤガレネギリ

タイーデなどと呼ばれるが、初潮のことはルゴージェという。初潮になるとダバリ（月小屋、不浄場）に入って、次のタルがくると、マーフルゴージェというブリエルからルゴージェへの移行を示す小規模な成女式にあたる祭宴（ミティミティ）があり、黒くそめた糸の首飾り（マルフォウ）をつけ、歯を黒くそめる。以後は父親の住居の近くに特別な小屋（タフェン・エ・ルゴージェ＝ルゴージェの家）を建ててもらい、ここに寝泊りし男性及び年齢の異なるカテゴリーの者と食事を別にし、特別な田畑が割り当てられ、それ以外の田畑に入ることは許るされない。ルゴージェになると結婚することが可能になる。

結婚すると、女は夫の父の家の近くに建ててもらった小さな家屋に住む、当初は夫の料理はその母親がするが、やがて夫の食物を調理する権利が与えられる。夫婦は夫の父よりそれ自体の田・畑・ヤシの樹等を割り当てられるが、夫の食べる芋類の植付け、収穫はまだ夫の母がする。ヤップ社会では子供が産まれるまでは、夫婦関係は不安定で、離婚もむずかしくない。

子供が産れると、事情は大きく変る。離婚の際には子供は父親のもとに留まるのが原則であり、母親が子供を養育するために子供のもとにすることが、男の両親、女の両親等々から強く要求されるので、離婚は困難である。子供を出産した女はルカンアロウのカテゴリーに入る（もともと子供が産れなくとも30才位になるとルカンアロウになる）。ルカンアロウになると、それ自体の田畑を割り当てられると共に、ガバルバル、フナヤガル等の若い男（パカリ）の田畑に入ることが可能になり、その料理をすることを許される。

子供が産まれなくなると、女はプエルオルのカテゴリーに入り、別の田・畑が割り当てられ、タビナウの長になっていると考えられるフナヤガルの男達の田・畑を耕作・収穫し料理することが可能となる。年をとって何もできなくなるとラバシエリといわれる。⁶³

男性の場合は、ピテールつまり子供は、母親と一緒に住み、食事を共にしているが、18～20才位になるとガバルバルと呼ばれ、赤・白・青の3枚のふんどしをつける。20～23才になるとガルといういちびの飾りふんどしをつけ、ガバルバルとなり、田・畑を別にして、食事も別にするようになる。ヤップ社会では結婚して子供を持った者でも、まだタビナウの財産管理、村の行政等に対する責任は持っていない。ヤップ社会では40才の後半から50才の前半になって、タビナウの長（マダム）として責任を持つ立場につくのであって、それ以前は若者あつかいにされる。マダムになると家族の長として村会議に参加し、対外的なスポークスマンとしての役割をはたすようになる。以前人口が多かった頃は、タビナウの長の地位は、年下の兄弟ついで年長の息子の順に移るので、50代になるまでマダム、つまり責任を持つ男（プムオン）になれなかったが、今日では人口減少の結果、早くなっている。一人前のプムオンになるとルクウナウグイのカテゴリーに入る。このルクウナウグイの田畑にはプエルオル以上の女が耕作し、その調理をする。年をとるとピリビシエルのカテゴリーに入る。

ここに概説した性と年齢によるカテゴリーにそって、田・畑・ヤシの樹等が家族成員各々に割り当てられている。つまり村内の土地は多くの筆に分れ、各々のタビナウによって保有されているが、それがさらに家族の成員ごとに再割り当てされているのである。その結果各タビナウにはルゴージェの田畑、ルカンアロウ、プエルオル、ラバシエリの田畑、さらにパカリ、ルクウナウグイ、フナヤガル、ピリビシエルの田畑として等々と各成員ごとに割り当てられる土地が保持され

ているのである。さらに各々のカテゴリーごとの炊事場、炊事道具が別々に保持されている。また家屋に関していえば、主なる家屋には年長の男女が住んでおり、若い夫婦は近くに建てられた小さな家屋に、若い娘はタフィネルゴードに、若い男達はファルウ（男子小屋）で寝泊りしているのである。

この家族内における性と年齢によるカテゴリーは、村においては男性にみられる年齢階級（エグム）の制度に顕在する。村には通常六階級のエグムがあり、特定のダイフを有する特定の年齢の男子が特定のエグムに帰属する。つまり、上級エグムに入るためには、上級の位階のダイフを所有するタビナウに帰属していることを必要とするのである。端的に云うならばタビナウ（正しくはそれが保有するダイフ）の階級と年齢階級との結合によって、村における各個人の地位が定められる。ラン村には上から順に（1）タラン、（2）ランニマル、（3）ピエッチ、（4）トルー、（5）ヤガッチ、（6）グムヌヴェツの6つのエグムがある。

男子は13才位でグムヌヴェツに、17～18才つまりガバルバルのカテゴリーに入るところヤガッチに、20才位でフナヤガルのカテゴリーになるとトルーの各エグムに入る。以後30才位でマセックに入り、ランニマル、タランと進んでいくのであるが、タラン、ランニマル、ピエッチの上位階級に進むことをドアッチという。上階の階級に進む資格は村のピルン、長老達、若者の父などによって決定され、上の階級に進む際にはムクンという祭宴がなされ、その仲間に対して貨幣を支払い、食物の共食等の儀礼がなされる。最上位のタラン（ムンシンとも云う）は、高い位階を有する年長者によってしめられている。つまりタランになるのは、位階の高いダイフの所有者であることと、年齢が長老的であることの二つの条件で構成され、彼等は村の政治に携り、祭宴等の場合に栄誉の地位を占め、貨幣等の分配の際にも優先権を有する。逆にそうでないものはランニマル、ないしはピエッチに上り得るにすぎないし、そこにも達しえない場合もある。ラン村のダイフの中、タランに上進できる資格を有するダイフは〈グチャル〉以下12のダイフにすぎない。またランニマルで留まるダイフは〈ラネド〉、〈ファヌマサオ〉等々であり、ピエッチにもいけないのは〈バラバット〉、〈ゲルブッチ〉などがその例である。

通常は年齢の順に従って入るのであるが、一つのタビナウの成員構成を考えると、例えば父がタランであれば、息子はランニマルかピエッチに留まっている。他方、父が早く死んだ場合など、タビナウに年長の者がいないと、年が若くても上級のエグムに上進したり、一ないしは二段とびこして上進することもある。

ドアッチになると様々な食物の禁忌があって、タロ芋、サト芋（マル）、魚、パパイヤ、ヤシの実、バナナ、ポイの実以外は食べてはいけず、ヤム芋、カボチャなどはたべない。また自己よりも上級もしくは下級のエグモの食物に触れることさえゆるされない。タランになると、彼は女性や若い男達と食事を共にすることができない。彼はランニマルの人に食物を与えることはできるが、ピエッチの人に与えることができない。ランニマルの男はタランの人から食物をもらえて、ピエッチの人に与えることができる。彼も女性と若者と食事を共にしない。ピエッチの人はタランかランニマルの者に食物を与えることが許されず、やはり若い男や女性と食事をすることがない。このため村にはピエッチ以上の年長の男達がたべるタロ芋田を保有している場合もある。これらの禁忌は現在村人の人口が減少したために、必ずしも守ることが不可能であるので、くずれ

てゆく傾向にある。⁴⁹

10. ラン村のタロ芋田の使用

以上の性と年齢によるカテゴリーとエグム（年齢階級）に従って、畑・タロ芋田・ヤシの樹その他の使用が明確に区分されている。そこで一例としてラン村のタロ芋田の使用について触れておこう。今回の調査においてはランヌビナウ（屋敷地が集中している集落）内にある芋田に関する調査しかなかった。ラン村の人の芋田は山を越えたモロワイ村に多く持っているがそれは未調査（表Ⅶ，表Ⅷ）。

ラン村のほぼ中央に東西に向けて河川が流れているが、その南側にある二つの大きな田（モウト・ニ・マリウ）は、海を埋め立てて作った田で、より大きな田（地図のBの田）は、ドアッチ以上の年長者の田としていくつかの筆に分けて、各ダイフに分けたという。芋田の上の方はタランの、中ごろはランニマルの、下方はビエッチの使用する畑となっている。もう一つの大きな田は若い男達（バカリ）の田として分割したという。このように大きな田は個々の筆に分割されているのである。なお、その他の田に関して云うと、ほぼ河川の南側にそって散在する田は男達や年長の女の使用する田で、河川の北側にある田はルゴード・ルカンアロウなどの若い女達の使用する田となっている。各ダイフにはいくつかのタロ芋田が付属しており、それぞれの成員によって使用されている。なお村には98筆のタロ芋田がある。以下二、三の例をしめす。（表Ⅴ）。

〈アブルゴク〉の例。ギリルン（ビエッチ・ルクウナウグイ）が保有するダイフで、9つのタロ芋田が付属している。大きな田にあるB-3, B-5の田はピリビシエル（＝タラン）の田で、妻（プエルオル）は入れないので、ギリルン自身が耕作し食べている田である。⑩⑪⑫はルクウナウグイの田でこれもギリルンがたべる田であるが、妻は入ることができる。⑭⑮は妻が使用する田、A-5はバカリの田で息子チョアイ・ウントマンが使用している。なお、ギリルンはフヌオと共に、資源使用協業集団を構成している点は述べたが、ギリルンはその他フヌオ所有の4つの田を使用している。これはフヌオはフナヤガル・トルーであるので、例えば〈タラル〉につくB-1, 18はピリフェリの、⑰はルクウナウグイの田であるのでその芋を食べることができないからである。

〈フナガルル〉の場合。ワース（タラン）の保有するダイフで、5つのタロ芋田がつく。B-12はピリビシエル（タラン）B-12, B-13, B-15はルクウナウグイ（ランニマル）の田でワースが使用、40-1, 40-3はルカンアロウの田で妻（ルカンアロウ）が使用している。

〈タエブ〉の場合。マガブチャン（タラン・ルクウナウグイ）の所有するダイフで、6のタロ芋田が付属している。A-4, A-7, A-11はバカリの田で長男リキンが使用、24, 40-2はプエルオルの田で妻が使用、B-11はピリビシエル（タラン）の田でマガブチャンが使用している。

〈フィティチ〉の場合。ギリフェス村のギメン（ビエッチ）の保有するダイフで5つのタロ芋田がつく。35-1はルクウナウグイ、40-4はルカンアロウ、46-1, 43-2はルゴード、44-2はピリビシエルの使用する田である。

以上は特定のダイフに関してのことであったが、今日個人は2つ以上のダイフを持っているの

表Ⅶ ラン村のタロ芋田の使用

タロ芋田の調査番号	保有者	付属するダイフ	使用者	補	註
1	マガブチャンとデフロウ		未使用	バカリ	
2-1	フヌオ	<6>	タマゲン	バカリ	
2-2	ワース	<9>	ケンとイルボ	バカリ	
3	持主不明		未使用		
4	バロイ	<24>	〃		
5	ワース	<9>	〃		
6					今はニツバヤン、この使用は、フヌオ、バロイ、ワース、マガブチャンに相談して使用
7-1	ワース	<22>	〃	ルゴージェ	
7-2	フラワーの妻	<23>		ルカンアロウ	
8	マガブチャン	<21>	マガブチャン	ピリビシエル	
9	〃	<21>	〃		
10	ギリルン	<20>	ギリルン	ルクウナウグイ	
11	〃	<20>	〃	〃	
12-1	〃	<20>	〃	〃	
12-2	ワース	<16>	ワース	ピリビシエル	
13	〃	<16>	〃	フナヤガル	
14	ギリトマン		妻	ルカンアロウ	
15-1	ワース	<17>	妻	プエルオル	
15-2	フヌオ	<14>	ギリルン	ルクウナウグイ	
16	フヌオ	<14>	フヌオ	フナヤガル	
17	〃	<14>	ギリルン	ピリビシエル	
18	〃	<14>	ギリルン	〃	
19	ワース	<13>	テプル	ラバシエリ	
20	〃	<13>	〃	〃	
21	〃	<13>	ワース	フナヤガル	
22	デフロウ	<1>	母	ルカンアロウ	
23	ワース	<12>	テプル	ラバシエリ	
24	マガブチャン	<4>	妻	プエルオル	
25	ワース	<29>	〃	〃	
26	バロイ	<15>	バロイ	ピリビシエル	
27	〃	<15>	妻	プエルオル	
28-1	ギリルン	他の人よりもらう	ギリルン	ルクウナウグイ	
28-2	リヨン		ルグモウ	〃	
28-3	マガブチャン	<19>	マガブチャン	〃	
29-1	〃	<19>	〃	〃	
29-2	フヌオ	妻のギリウギン	フヌオ	〃	
30	ワース	<16>	娘	ルゴージェ	
31	ヤツトマン	<37>	妻	プエルオル	
32	デフロウ	<43>	バロイの妻	プエルオル	
33-1	ワース	<42>	妻	〃	
33-2	フヌオ	ギリフェス村よりのイレンアマガル	妻	〃	

34	ワース	<42>	テブル	ラバシエリ
35-1	ギメン	<45>	ギメン	ルクウナウグイ
35-2	ワース	<42>	テブル	ラバシエリ
36	ギリルン	<20>	妻	プエルオル
37-1	ワース	<41>	〃	〃
37-2	ルグモウ	<44>	〃	〃
38	ワース	<41>	〃	〃
39	〃		ヤン	娘へギリウギン
40-1	〃	<35>	妻	ルカンアロウ
40-2	マガブチャン	<4>	マガブチャン	
40-3	ワース	<35>	ブルグメット	ブルグメットのギリウギン
40-4	ギメン	<45>	姉	
41	ワース	<29>	未使用	ラバシエリ
42	〃	<34>	〃	ルゴード
43-1	ルグモウ	<44>		〃
43-2	ギメン	<45>		〃
44-1	ルグモウ	<44>		ピリビシエル
44-2	ギメン	<45>		〃
45	フヌオ	<46>	チョアイの妻	ルカンアロウ
46-1	ギメン	<45>		ルゴート
46-2	マガブチャン	<47>		〃
47	ワース	新しい田		〃
48	〃	<29>	ヤン	ヤンにギリウギン
49	フヌオ	<8>	妻	ギリフェスからのギリウギン
50	ギリルン	<20>	妻	プエルオル
51	〃	<20>	〃	〃
A-1	デフロウ	<11>		バカリ
2	ワース	<9>		〃
3	バロイ	?		〃
4	マガブチャン	<4>	リキン	〃
5	ギリルン	<20>	フヌオと子供	〃
6	ワース	<31>		〃
7	マガブチャン	<4>	リキン	〃
8	レモオン	?		〃
9	フリムル	?		〃
10	ガウガモウ	<7>		〃
11	マガブチャン	<4>	リキン	〃
B-1	フヌオ	<14>	ギリルン	ピリビシエル (タラン)
2	ワース	<16>	ワース	〃
3	ギリルン	<20>	ギリルン	〃
4	ワース	<13>	ワース	〃
5	ギリルン	<20>	ギリルン	〃
6	ワース	<13>	ワース	〃
7	マガブチャン	<21>	マガブチャン	ルクウナウグイ (ランニマル)
8	〃	<38>	〃	〃
9	フヌオ	<46>	ギリルン	ピリビシエル
10	デフロウ	<1>	バロイ	〃

B-11	マガブチャン	<4>	マガブチャン	ピリビシエル
12	ワース	<35>	ワース	〃
13	ワース	<35>	ワース	ルクウナウグイ
14	フナフェル			ピリビシエル
15	ワース	<35>	ワース	ルクウナウグイ
16	パロイ	<24>	パロイ	ピリビシエル
17	ワース	<9>	ワース	ルクウナウグイ
18	フヌオ	<8>	フヌオ	〃
19	〃	<8>	〃	〃

が通常であるので、各個人の保有している全てのタロ芋田についてみると、

マガブチャンはラン村内に12のタロ芋田を保有しているが、24、40-2は妻（プエルオル）、A-11、A-4、A-7は息子のリキン（バカリ）、8、9、B-11（ピリビシエルの田）、B-8、28-3、29-1（ルクウナウグイの田）はマガブチャンが使用している。なお8、9、B-11には妻は入ることができない。

ワースは16のダイフを持ち、31のタロ芋田を保有している。B-4、B-6、B-2、B-12はピリビシエルの、B-17、B-13、B-15はルクウナウグイの、13、21、12-2はフナヤガルの田で、実際はワースが使用する田で、ピリビシエルの田は妻モウテは入れない。A-2、A-6、2-2はバカリの田で息子のケンとイリボが使用、20、19、23、34はラバシエルの田でオクスの叔母テプルが使用、15-1、25、37-1、38、40-1、33-1、35-2はプエルオルの田で妻ベラワルが使用している。7-11、30はルゴードの田で親戚のルゴードに芋をやるときに使用、40-3はワースの妹へ、48は娘へギリウギンとしてあげた。5、42、41は現在使用していない。なお、表Ⅳに持主、その使用者について示しておいた。

表Ⅷ ラン村のタロ芋田

持主	数
マガブチャン	12
ワース	31
フヌオとギリルン	19
デフロウとパロイ	8
ガラガモウ	2
他	16
計	98

11. トブグルとタアイ

以上指摘した年令と性別によるカテゴリーにもとづいた Separation の基底に流れているのが、トブグル（浄）とタアイ（不浄）の観念であるように思われる。トブグルという言葉、概念はかなり広い分野に渡って使用されているが、年長の男、すなわちプムオン（the man）、ピリビシエル（the older man）、ドアッチになった男達の住む所、食物、炊事場、道具、田、畑をさし、さらにはプムオン達の使用する集会所、カヌー、道も含まれている。他方タアイはきたない所、特に月小屋（ダバリ）をさし、初潮をみた若い娘たるルゴードが一番のタアイとされている。また月経期間中の女もタアイとされている。トブグルに関する禁忌や制限をマチマチ・トブグルというが、タアイの者はトブグルにあたるものに近接してはいけないとされている。例えば月経中の女がダバリから帰る時には身体を洗って後でないと家に入ることはできない。ルゴードが年長の男達の炊事場に近よると「ソロゴン（きたない）」といわれる等々。つまり月経中とか妊娠時の血に対する不浄観がそこに一貫して流れているように思われる。逆に云えば月経が止まり、増

殖力がなくなるとトブグルに近接することが可能になり、女性も年をとりピリフェリ(the older women)になるとトブグルになるようである。このトブグルとタイはやはり食物に関して顕現しているので、その線にそって触れてみよう。

男は前述の年齢階級(エグム)でいえばピエッチ以上になるとトブグルになると考えられ、最高のエグムたるタランになって最高のトブグルになるとみられている。ピエッチ以上に進むことをドアッチというが、ドアッチになると、タロ芋、サト芋、ヤシの実、バナナ、パパイヤ、ポイの実、魚以外は食べてはならないとされ、ヤム芋、さつま芋、かぼちゃ、さらにはブタをたべない。この理由として説明されるのは、ヤム芋は葬送をめぐって備される儀礼的交換に使用されるのでタイであるからで、かぼちゃ、さつまいもはタイであるヤム芋畑に植えられているものであるからだという。ブタもタイである者の残りものをたべるので、タイであるという。しかし、これらの点はもう少し調査し、分析せねばならぬ所である。年長の男達のイモ類をつくる田、畑はトブグルのカテゴリーに入る。特にピリビシエル(the older man)やドアッチの男の田、畑は特にトブグルであるとされている。例えばラン村の大きな田は海を埋めたて作り、上層エグムのタラン、ランニマル、ピエッチの男に割り当てた田であるが、その際トミールのタブ村のタリュウ(聖地)のタメロン(呪師)に来てもらって、トブグルにしてもらったという(その時タメロンは、「ケ ウヌン タメロン ダイン レ マウト ネイータメロンがこのモウト<田>に残った海<ダイン>をのんだ」ととなえたという)。

田・畑の耕作・収穫に従事するのは女性であるが、年長の男の田には月経の終わったプエルオルカラバシエリしか入れない。ルカンアロウのカテゴリーの女性が入らねばならないときは、女の父がトブグルという石貨(フェ)を出して、タイの女がトブグルの田・畑に入るのを黙認してもらう。ピリビシエルの田の中でタランのそれには、ピリフェリ(the older Women)のカテゴリーの老婆しか入れず、いない場合には男自身が耕作し収穫する。子供はタイで田畑に近よることをしない。

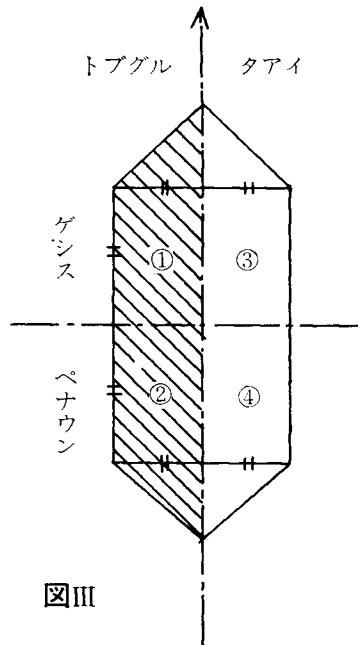
ルゴートは自分に割り当てられた田・畑以外に入ることは許されず、結婚している場合も夫のたべる食物は、夫の母が作っている。月経中の女もタイなので田畑に入ることはせず、月小屋から家に帰っても、さらに3日間は近づけないという。タイの人が田に入ると、その田はトガフ(悪く)なるという。なおルゴード、月経中の女は、会議所、舞踊場等の男達の集るところに近づいてはならぬとされ、歩く路も男達の通る本通りはさけて、ミリングイが通る裏通りを歩行しなければならない。

また、一般的に田・畑をめぐる禁忌は厳しい。田・畑には朝早く食事をする前に行く。たべる場合でも調理した食物はさけて、ユプラ、ヤシの液、バナナ、パパイヤなどのなまのものをたべる。火にかけたものを食べると田・畑がやけてしまうという。また植付けとか収穫の前日は性的交渉はしてはならない。その他田に行く前に貝をたべてはならぬ等の禁忌がいくつかあることを一言しておく。

また、長老の男や夫等の男達のイモを収穫する際、女達は日常のこしみの(オーン)を各々特別のこしみの(マールーバナナ、イチビ、ヤシの葉のうちいずれか一種類から作ったこしみので、彩色していないもの)に取りかえる。また調理する際にも長老、夫ごとにこしみのを取りか

えて、各々の畑です。この男達の食物を収穫したり、調理する際に着用するこしみの（マール）もトブグルのカテゴリーに入る。

さらにトブグルとタアイは、家屋の住みわけにおいてもみられる。ヤップの家屋は図の様に六角形で、棟木の根本からみて左側がトブグル、右側をタアイ、上半分をゲシス、下半分をペナウンといて、左下をヴァニ・トボグル・ペナウン、左上をヴァニ・トボグル・ゲシス、右下をヴァニ・タアイ・ペナウン、右をヴァニ・タアイ・ゲシスという。図の①は主人の持分で、男の炊事場（ソープ）、②は主人の椰子の実その他の食物の貯蔵場である。④に年長の男、③に年長の女、子供がねる。若い娘はタフィネルゴートへ、若い男はフルーでねる。トブグルにはルゴードや子供は入らない。家の周囲にあるヤシの木、バナナ、ボイの実の木等の食用樹も一本一本誰の食用に供せられるのかきめられており、ほぼ左下側に長老の、右下側にプムオンの、左上側に老婆の、左上側に妻と子供の持分がある

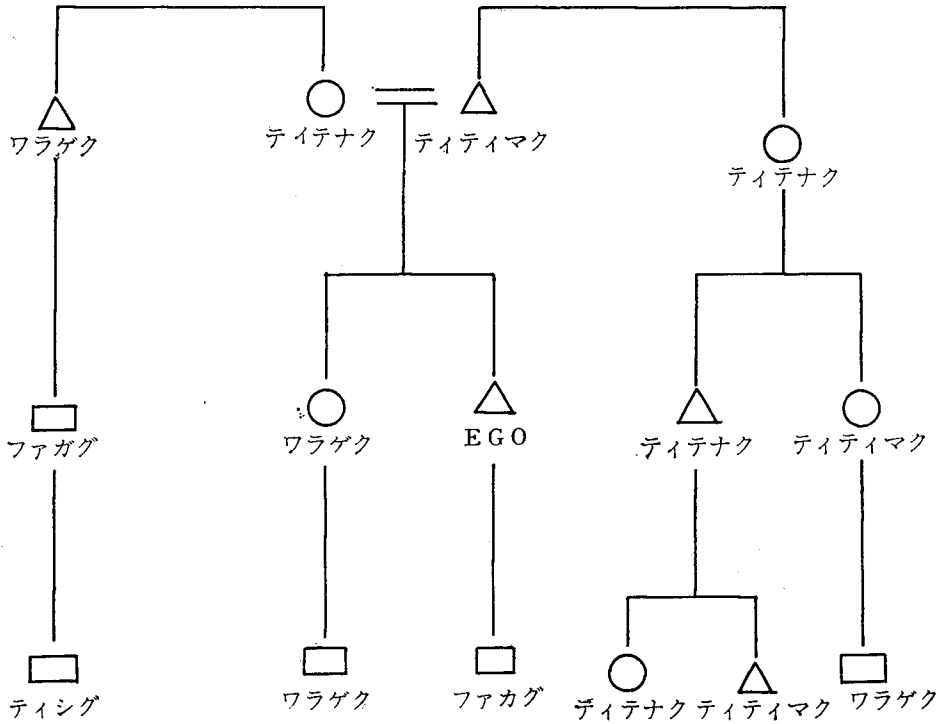


るのが理想的であるようだ。ルゴードのものは宅地から離れている。この点は多少ともヤップ各地で変異があるようで、さらなる調査を要する。⁴⁹

12. クロウ型の親族名称と父の姉妹⁵⁰

ヤップの親族名称は **refrence** としてのみ使用され、呼称としてはまれに儀礼の文脈や冗談として使用されるにすぎない。親族間においては親に対してでさえ個人名で呼称し合っている。ヤップの基本的な親族名称は、父（ティティマク）、母（ティテナク）、祖父（トットゥ）、祖母（ティタウ）、兄弟姉妹（ファカグ）、子供（ワラゲク）、まご（ティシグ）に限られている。この親族名称の数が少ない点は世代型の名称体系の特徴であるが、ヤップの体系はクロウ型への傾斜をしめしている。**crosskinship** について見てみると（図IV）父の姉妹は母あつかいであるが、父の姉妹の子供、父の姉妹の娘の子供は名称上一世代ないし二世代繰上って父母あつかいされる。他方母の兄弟は自己と同格あつかいされて兄弟のカテゴリーに入り、母の兄弟の子供は娘息子あつかいにされ一世代繰下げられている。従って男からみて姉妹の子供は自己と同格の兄弟姉妹あつかいとなり、女からみて兄弟の子供は娘息子あつかいされることになる。ここで注目されるのは父の姉妹の女系ラインが父母あつかいにされ、一世代ないし二世代名称上繰上げられ、母の兄弟（又は男からみて姉妹の子供）が自己と同格あつかいされることである。これはヤップの名称体系は世代型の名称のままで世代の繰上げ繰下げを通じてクロウ型に近いものをつくり出しているといってもよいかもしれない。従来クロウ型の親族名称は母系制とある種の相関関係があると示唆されてきており、ラドクリフ＝ブラウンはそれをリネージュ一体の原則で説明せんとしていると

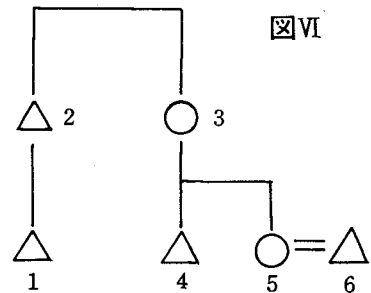
図IV 親族名称(Crosskinship)



ころである。ヤップ社会ではせまい範囲の父系リネエジとならんで、非地縁化した母系 Sib (ガノン) が、トーテム祭祀、外婚規制、ホスピタリティの機能、あるいはある種の聖地との関連において顕現している。そして島民も父の姉妹ラインに関してガノンの線で説明をしているところではある。けれどもこの母系 Sib の線にそっての説明は多少困難な点があるように見受けられる。

まず自己と父の姉妹との関係に目をつけてみると、ヤップ社会では父の姉妹のことをマフェンという。父の姉妹が亡くなるとその娘がマフェン、その息子はマタムと呼ばれる。マタムは家の主の意でもあることに注意される。さてマフェンはある種の特権を持っていて、兄弟の息子はマフェン（父の姉妹又は父の姉妹の子供）に対しては尊敬・従順な態度・行動をせねばならないとされている。一方マフェンは兄弟の子供がマフェンに対する義務をおこたったり、慣習にそむいたりしたり、マフェンの云うことをきかなかったりした場合

には、かれをその土地から追放することができる権限を持っていると云われている。図によって説明すると EGO 1 のマフェンは 3 で、1 は 3 に対して尊敬の念を払い、ある種の義務をはたさねばならない。一方 3 も 1 に何かあれば相談にのり 1 に対して責任を持っている。例えば 1 が何かことを起して他人を傷つけた事態が起きた場合、3 ないしは 5 と 6 が石貨を支払って話をつけてくれるなど。他方 1 が 3 の命令に従がわないとか、慣習を何回もやぶるとかすると、3 は 1 を追



放することができるのである。かくのごときマフェンつまり父の姉妹は兄弟の子供に対してある種の責任と特権を持って行動する。このマフェンの特権は、父の姉妹がなくなるとその子供に引き継がれて、5と4が各々マフェン、マタムとなるのである。

このマフェンの特権について、ヤップでは、女は婚出して生家の財産に関する権利をすてるのであるが、やがてその生家のマフェンになるのだと説明しているが、マフェンは自分の生れた土地⁵³ に対しての権限を要求しているのではない。Schneider はこの点に注目して、この父の姉妹の兄弟の子供（リネエジのすべての子供に対してではない）に対する権限や制裁は、姉妹が兄弟に対して持つ保護、世話に関する要求権及び姉妹は自分の生れた父系リネエジの成員として、つまり born of the land として持つ要求権に源泉をもとめるととらえ、兄弟と姉妹の関係と filiation の関係に根ざすものであると説明している。ヤップでは男が死んだ際その人の所有している一定の土地のヤシの実、バナナ、ヤム芋等が7—8カ月採取し使用することが禁止される。これをガニィ・オク・リュウ（リュウを設定するの意）というが、このリュウを解いた際（ガニィ・タレグ・リュウ）に、祭宴が備されて貨幣の交換と分配がなされ、リュウしてきた食物が分配される。Schneider によると、これらの食用果実、つまり兄弟の死後7・8カ月間にその土地からとれた生産物は、姉妹に与えられる。そしてこのことは姉妹の兄弟に対する要求をシンボライズしたものであると解釈できるとした。けれどもこれは Schneider が調査したルモン島におけることであって、ヤップ全島に適応できる解釈ではない。他の所ではリュウ（禁忌）にした生産物は死んだ男のマフェン（＝父の姉妹又は父の姉妹の娘）に与えられるもので、死者の姉妹に分けてはいけないとされている。分けると兄弟姉妹が同じなべの食物を食べることになり、これは兄弟姉妹が夫婦になることを意味するのでよくないという。

ガノン（母系 Sib）との関係であるが、父の姉妹と父の姉妹の息子は、父の母系 Sib の成員であって、自己の母系 Sib の成員ではない。また父に姉妹がいなかった場合に父の父の姉妹の子供をマフェンにする。さらにヤップ人は2種類のマフェンを持っている。1つはマフェン・ニ・ヴェッチ（新しいマフェン）で父の姉妹ないしはその子供をさす、2つはマフェン・ニ・レでこれは父の父の父の姉妹の女系子孫をさし、この2種のマフェンが個人にとって関連あるものであると考えられている。とするとマフェンは母系出自の線にとって必ずしも解釈できるものではない。つまり、マフェンの問題は Schneider の指摘するごとく兄弟と姉妹との関係に基点をおくとみられるとしても、むしろ強調点は姉妹の女系子孫と兄弟の男系子孫との関係におかれているように思われる。

それで別の局面から眺めてみると、ミティミティ（儀礼的交換を含む祭宴）の際におけるマフェンの儀礼的役割が注目される。ヤップでは求婚、結婚、誕生、名付け等々の個人の通過儀礼の際に、石貨、貝貨、イモ類、魚、ヤシの実等の儀礼的交換がなされる。この際にマフェンつまり父の姉妹が特別かつ重要な役割をはたすのである。例えばマフェンはこれらの財物の分配役をしたり、石貨や貝貨を用意してくれる。さらにはサギス（家族霊）はマフェンの云うことなら聞いてくれるとみられており、ある種の霊的祝福に関する役割をはたしている。この線にそってみるとマフェンの特権は兄弟の男系子孫に対する姉妹の女系子孫の霊的優位に説明を求めることが可能かも知れない。この点は馬淵東一がオセアニア型として指摘している姉妹の子供の霊的優位の

問題と関連するところである⁵⁹。次節において儀礼的交換に触れる際に、このマフェンの役割に注目してみよう。

さて、この父の姉妹と対照的なのは母の兄弟である。母の兄弟は名称上もワラッグ（「兄弟」）あつかいにされているが、行動上においても、年長の兄弟に類似するものとして、親しみ深い、相談に乗ってくれる関係にあるものとされている。例えばフヌオにとって父の母の兄弟の子ギリルンは世代上は上にあたる者であるが、兄と呼んで、日常の生活に関して協業し、相談をしている。つまり母の兄弟は両親と兄弟の間にあるもの、両親の世代にはいるが、兄弟姉妹の成員とみなされる存在なのである。こうしてみると名称上の世代的な繰下げ繰上げを成立させた因果関係はまだ説明不可能であるにしても、それと親族関係者間にみる態度と行動との見合い関係は今後の調査によって究明できるようである。

13. 儀礼的交換

ヤップの貨幣にはその材質によって石貨（フェ）、蝶貝貨（ヤール）、ガウ貝貨、骨貨（マー）、俵貨（ウムブル）等の種類がある。ヤップ貨幣は、賠償金、罰金、上層階級への上進の場合の納金、祭祀に際しての献金等の政治的宗教的意義を有する財貨として、あるいはカヌー、家屋、魚の購買、文身、祈祷、埋葬の労務、特殊な舞踏に対する謝礼等の多少とも交換の媒介として経済的貨幣として使用される他に、許婚、結婚、妊娠、出産、死亡、追善等の儀礼、住家や集会所の建築、舞踊等の場合に貨幣を贈り、これに対して他の種類の貨幣又は食物で返礼する。ヤップの貨幣は8割までがこのような儀礼的交換に使用される⁵⁷。以下主に許婚、結婚、出産、名付けの儀礼における男側と女側間の儀礼的交換について、貨幣使用の二、三例を示しておこう。

男側と女側との儀礼的交換における特徴は、男側からは貝貨が、女側からは石貨が贈られる。さらに女側からはタロ芋等のイモ類が、男側からは魚、ヤシの実等が贈答されるのが原則である。すなわち、タロ芋、ヤム芋等のイモ類、石貨は女財、魚、ヤシの実、貝貨は男財ということになるであろう。

イ 求婚と結婚

結婚は夫方居住婚で、その際に簡単な儀礼がおこなわれ、花嫁と花婿のタビナウ間で貨幣と食物の交換がなされるが、それほど公的な性格のものではなく、しばしばオミットされる。

① 求婚（ケミッチ）。男の父は女の父に貝貨（ヤール又はガウ）を一つ持って頼みにいく。この貝貨をイエッグ（ヤシの葉脈に2・3びきの魚をさしたもの）という。その際に「バラ バアマラウ ニ ガナム ンガン ビテル ロム ニル グ ファカイ（あなたの娘を私の子供にしたい、このマラウ（コプラ）をたべて下さい）」とのべる。承諾の場合女の父は「カファル（よろしい）」という。つまり女側に贈与される貝貨は、イエッグ（魚）ないしはマラウ（ヤシの実）を象徴しているのである。この際に結婚の儀礼をするかしないかを決め、しない場合にはこのケミッチでえた貝貨の返礼はない。

結婚の儀礼をすることになると、マフェンと女の父との間に次のような話をする。マフェン「バイ エ イエッグ ファダリ（魚をたべたか）」、女の父「カバイ（たべた）」、マフェン「イダール ムリ タバン（あなたが払って交換しなさい）」、つまりケミッチで贈られた貝貨は女の

父が返礼するわけで、他はマフェンが用意するのである。

② モイ。結婚式には2つのミティミティがある。まず、男の父、マフェン、親戚、ピルンが女の家に行く。これをモイ（来い）つまり女を呼びに行くという意である。この時貝貨（ヤール又はガウ）とヤシの実、バナナ、魚を持っていく。女の家につくと持参したものをならべて、マフェンが貝貨（ヤール）を持ってのべる。「カプウ バデナグ モイ バラアバ ヤール ニ ポン ニ コフェケデイブ ニング ピンゲデ チィピン ネイ（今日モイのためにきた、このヤールは女を呼ぶため持ってきたポンである）」。これに対して女家ではびんろう樹、ヤシの実だけを用意して、女のマフェンがのべる、「カンマガール ニ コンバーデ ングナゲデ ギメデ メギメデ ナンマデ（来てくれてありがとう 私達の顔わかった あなた達の顔もわかった）」。ここでは貝貨はポンと呼ばれ、これはマフェンまたはピルン（各村の区長）が取る。

③ ウウブガタビナウ（あなたの村はどこか）。これは女側が男の家に行って貝貨に対して石貨の返礼をする。女の父が大きな石貨（これはケミッチの時贈られた貝貨イエッグと交換する）1つ、女のマフェンが石貨2つ（1つはモイの時の貝貨と交換、他はトブグルという）、その他小石貨10個位（ガネィフィタといってモイの時贈られた魚に対する返礼）、イーム（タロ芋を葉でくるんだもの）1～2、タカバイ（バスケに入れたタロ芋で上にマル（サト芋）をのせる）3～4を持っていく。持参したものを家の前において、マフェンかピルンがのべる、「ガマデ カプバデ ガ タビナウ ガグナゲデ タビナウ マギネデ ナンマデ（私達は家に来た。私達は家を知った、あなた達も私達の顔がわかった）」、ついで石貨を示して「バライ タバネ エッグ（これはエッグと交換するもの）」「バライ タバネ モイ（これはモイと交換するもの）」「ビネイ タバグル コ リィティル ネイ バイイヤン、ウタギリカン プムオン マコフェケデアウチュメデ ロク（これは子供のタバグルである、男の食べものをおく所を歩くが知らない顔

表Ⅷ

	男家側	女家側
ケ・ミ ッ チ	男の父 貝貨（イエッグ）	① → 女の父
モ イ	マフェン 又はピルン 貝貨（ポン）	② → マフェン 又はピルン
	親 族 魚、コプラ、バナナ	③ → 女の父 親族
ウウブカタビナウ	男の父 ← ①	石貨（エッグ） 女の父
	ピルン又はマフェン ← ②	石貨（タバネモイ） ピルン又はマフェン
	〃 ← ④	石貨（タバグル） 〃
	〃 貝 貨	④ → 〃
	魚を出した親族 ← ③	小石貨（ガネィフィタ） 10個 女の父 親 族
	マフェン ← ③	イーム（タロ芋） 1-2 〃
	男の母 息子 父 ← ③	タカバイ（タロ芋） 3-4 〃

をして下さい)」という。つまり若い娘がまだよく家の事情を知らないので誤ってトブグルに入りこむ場合もあるので黙認して下さいの意である。つぎに小石貨を芋のわきに立てて次に芋の話をする。この際に謙遜して葉（バガブ）の話をする。「バライ バガブ イム マテルパ ロマデ ブチュウ タカバイ ニ コフェケイブ マ バライ バヤン タネモン ガネフィタ（これはマテルパに使うイームの葉である、少しタカバイ持ってきた、それにこれは魚のためのタネモン—石貨—である）」。ヤップでは他村に行く時にはバスケットを持っていくのが慣習であるが、バスケットを持たぬ場合は小さな葉を持って歩くが、これをマテルパという。また石貨（フェ）はミティミティの際にはタネモンという。これに対して男側はタバグルの石貨に対して貝貨を返礼する。マフェンがヤールを持って石貨にかけて「タバネ タブグル（タブグルと交換する）」とだけいう。なおエッグは男の父、モイとタバグルはヤールを出したピルンまたはマフェンが取る。ガネフィタは魚をだしたものが取る。

ケミッチ、モイ、ウラブがタビナウの3つのミティミティを通じて、男家側からは貝貨、魚が、女家側からは石貨と芋が相互に交換される。図解すると表Ⅸの様になるであろう。

ロ 出産と名付け

妊娠7、8月になるとタメロン（呪師、女の母のタメロンがよいという）を呼んで、妊娠を促進する祈願をしてもらう。タメロンは呪言（ピーク）をのべて、呪薬（フライ）を与える。これをポリポリというが、これに対して貝貨で謝礼する。この場合にフライというミティミティをすることがある。子供が出産（ガラゲル）すると子供の父はダバリ（月小屋）に行つて小屋（タフェン・エ・ガラゲルという）をたて、ミリンガイのタベロン村の女（エリフという）をつれてくる。女と子供はここに引き移り9日目に名付け（フォルスүүス＝乳房）をするが、この時に小さなミティミティがある。

④ フォルスүүス、名付け、タフェンガラゲルです。子供の母の実家からイーム（タロ芋）3、小石貨1を持ってくる。男の姉妹（子供のマフェン）が子供の名前を初めて呼んで「魚 オット ガム アピッチ（—よ、起きて食べなさい）」という。これで子供の名が人々に知らされる。次の女の父が石貨とイームを出して「バラエ タネモン プリサギス コレ ティルニール ニ パル タビマル マゲカコローム ニ プリビセル（この石貨はその子供が年をとって年寄になるまで病気にかからないようにサギス（家族霊）に願うためのものである）」という。次に男のマフェンが貝貨（ヤール）を出して同じことをのべる。ついで女側がイーム（タロ芋）を、男側が3個づつをひもに結んだ3組のヤシの実（マラウ）を出して、相互に「タバネ マラウ（ヤシの実と交換する）」「タバネ イーム」という。ここでは男のマフェンが出す貝貨をヤシの実と、女の父の出す石貨とタロ芋が交換（シリエク）されて、男側では貝貨はマフェンがとり、タロ芋はマフェン、エリフ、子供の母がとる。サギスは各屋敷の土台（ダイフ）にいる先祖霊で、男の家、女の家、マフェンの家のサギスに祈願するのであって、サギスはマフェンの云うことを聞いてくれるという。ここにマフェンの靈的行為が注目される。

⑤ マアロウ（移る）。このホルスүүスの後、前の小屋を壊して女と子供は別の小屋に移り（マアロウ ガレブ タアン）さらに9日間いて、夫の家に移る。このときマアロウ（移る）というミティミティがある。この時に女の親から石貨1、イーム5～6を、男のマフェンが貝貨とヤ

シの実を出し、石貨は男のマフェン、イームはピルンとマフェンがとり、貝貨は女の父、ヤシの実
は女のピルンとマフェンがとる。この場合のピルンとは各村の区の長で、ミティミティの際に
その土地のピルンとマフェンには必ず一部を分配しなければならない。

⑥ フライとワイル 場合によってフライとワイルというミティミティが備されることがある。
フライはポリポリの際にタメロンからもらう薬のことで、ポリポリの際にする人もある。ワイル
のワイは子供を入れてかかえるバスケットのことであるが、これは男の土地をかこんで他の女がこ
なようにする儀礼で、結婚の安定を高めるもの。2つのミティミティは一緒にするのであるが、
これは大きなミティミティで男家側と女家側互に競うもので、女側はできるだけ多くの石貨、タ
ロイモ、ヤム芋を集め、男側でも多くの貝貨、ヤシの実魚を集める。この際自己の所有ではた
らない場合は他人よりマライ（借用）する。まず女の側から大石貨5つ出し、ピルンかマフェン
のべる「ピネア タネモン フライ（この石貨はフライー薬のためのもの）」「ピネア タネモン
ワイル」（この石貨はワイルのためのもの）「ピネア タネモン トブグル（この石貨はトブグル
のためのもの）」「ピネア タネモン リティブ コ マブゴル タブィキ ダルビエデ（こ
の石貨は夫婦がいつまでも別れないためのリティブ一杭一である）」「ピネア タネモン ケニ
ン ヤナマレ ニ タブィキ ダル ビエデ（この石貨が夫婦がいつまでも別れないで仲よく寝
るためのケニン一ござ一である）」。次に10~20の小石貨を出す、これは先の5つの大石貨に付
属しているものでンガリソタネモンという。これとは別に20位の石貨を出していう「ピネア タ
ネモン ガネフィタ（これは魚と交換するための石貨である）」、このガネフィタには、イ
ーム（タロ芋）をつける。次にマル（サト芋）を一問位のバスケットに入れたもの（ケブ）を子供
の父の姉妹（マフェン）の数だけ重ねていう「ピネィ エ ケブ ファネ マフェン（このケブはあ
なたのマフェンのものである）」。次にイームについてのべる「バラバガフ イーム ネ ファン
ア マフェン ネ ギリデ エン タビナウ ネイ（このイームはマフェンとこのタビナウの人のた
めのものである）」。次に男のマフェンが立ってこれらの物を分配する。つまりタバグルとリ
ティブの石貨はピルン、フライ、ワイル ケニンの大石貨はマフェンがとる。ンガソタネモン
はマフェンがまず取り、男の兄、父の兄、父などにわけると。ガネフィタは魚を出した者。
マルはマフェン、イームはピルンとマフェンが取り、残りは全員に分配する。

この後で男が用意したものを出す。男のピルンかマフェンがガウ貝貨5つと貝貨を5つ大石貨
の上にかけて「ピネ エ フラグファサン レ タネモン ネ（これは石貨のお礼である）」とい
う。次に女側が5つの石貨を出していう「タバネ ファラグワス（お礼に交換する）」。
これに対して男側は貝貨、俵貨（ブル）、骨貨（マー）を返礼し、つぎにンガソタネモ
ンの小石貨の上に貝貨（ヤール）をかける。次にヤシの実、魚を出して「プエル
バケ トオブ ゲ ニグ
ネ アビッチ ロメーデ ベエル バケ マラウ リー タバネイーム（これはイームと交換する
オチョブ（飲用のヤシ）、魚である。皆でたべて下さい、さらにヤシの実もある）」とい
う。女の方でヤールは石貨を出した人が取る。

⑦ プアツグ（髪の毛をきる竹のナイフ）、子供が2才~3才のときに頭の毛を竹のナイフ
で切る儀礼がなされる。このときにも男側は魚、ヤシの実、バナナを用意し、女側はイ
ーム（タロ芋）を用意する。女家のピルンかマフェン石貨を1つ出して「バライ ア
タネモン ニ ブ

アトウ ナフラン サギス コ ブチイル ナニ プアツウグ ナグ ヌ タビマル (この石貨は頭の髪をきるための石貨である、子供が髪を切って病気にかからないようにサギスを喜ばす)」。これに対して石貨の上に10位のヤールをかけて、男のマフェンが云う「バライア ヤール プリサギス コ ブチイル ナニプア ロルゲン マタビマル (子供の髪を切って病気にかからないようにサギスに祀るためのヤールである)」という。以上を図解したのが表Xである。

以上2・3の例に示されるごとく、男家側からは貝貨、魚、ヤシの実等の男財が、女家側からは石貨、タロ芋等の女財が相互に儀礼的に交換され、その際に各々のピルンとマフェンが重要な役割をはたしていることが指摘できる。ヤップの社会体系において貨幣が重要な役割をはたしている。Müllerによると、「ヤップにおいて社会生活の原動力は貨幣、貨幣、貨幣だ」。

(74. 1. 20)

表X

	男 家 側	女 家 側
フォルスウース	マフェン ← ⑤	小石貨 (プリサギス) 1 女の父
	マフェン エリフ 子供の母 ← ⑥	イーム
	マフェン 貝貨 1	⑤ → 女の父
	コプラ 3	⑥ → "
マ アロウ	マフェン ← ⑦	石貨 女の父
	マフェン ピルン ← ⑧	イーム 5~6
	貝貨	⑦ → 女の父
	コプラ	⑧ → ピルンとマフェン
フライとワイル	マフェン ← ⑨	大石貨 (フライ) 女の父, マフェン
	マフェン ← ⑨	大石貨 (ワイル)
	ピルン ← ⑨	大石貨 (タブグル)
	" ← ⑨	大石貨 (リィティブ)
	マフェン ← ⑨	大石貨 (ケニン)
	マフェン 父 兄 ← ⑩	小石貨 10~20 ンガリン タネモン
	魚を出した者 ← ⑪	小石貨 (ガネィフィタ)
	マフェン ← ⑫	タロ芋 (マル)
	マフェン 親 せき ← ⑬	イーム (タロ芋)
	ガウ貝貨(フラグワサン) 5	⑭ →
	← ⑭	石貨 5
	貝貨, 骨貨, 俵貨	⑭ →
	貝貨	⑩ →
	ヤシの実	⑫ ⑬ →
	魚	⑪ →
プアツウグ	マフェン ← ⑭	石貨 (プアツウグ) マフェン, ピルン イーム 3
	" 貝貨 ヤシの実	⑭ → "

註

- (1) この調査は昭和48年度文部省科学研究費補助金及び南山大学特別研究費の援助をえて、ヤップ島ファニフ地区ラン村を中心に2・3の村落でおこなった。予備調査に参加したのは牛島嶽と青柳真知子氏であり、青柳氏はギリフェス村を中心とする調査をした。なお、現地においてロボマン大酋長以下ルクツン、リビヤン、フラメツツ、ワグ氏、ならびにファニス管区のケニメデ、ラン村のマカブチャン、ワース、フヌオ各氏他の協力をえたことを感謝する。さらに現地滞在の松延宏夫妻に大変御世話になったことを合せてお礼をのべておきたい。
- (2) ミクロネシアの栽培作物に関しては、J.Barrau *Subsistence Agriculture in Polynesia and Micronesia*, Bishop Museum Bulletin 223, 1961
- (3) ヤップ島のタロ芋栽培については、D.Y.Kim and F.Defngin Taro Culture as Practised by the Yapese, in : *Anthropological Working Papers* No.6 1964
- (4) ヤップ島のヤム芋栽培と儀礼については、杉浦健一「ミクロネシアの農耕儀礼」『新嘗の研究』昭和28年。F.DEFNGIN Yam Cultivation Practices and Beliefs in Yap, in : *Anthropological working Papers* No4 1964
- (5) ヤップの漁業に関しては、杉浦健一「ヤップ島民の漁業と漁具」『人類学雑誌』54巻2号1939年
- (6) Barrau 1961
- (7) Kim and Defngin 1964 : 50~52
- (8) Defngin 1946 : 42~50
- (9) 以下、矢内原忠雄『南洋群島の研究』昭和15年54~81頁。W.Müller; YAP, *Ergebnisse der Südsee-Expedition* 1908~1910 (G.Thilenius) 1917 : 10
- (10) J.H.Underwood : Preliminary Investigations of Demographic Features and Ecological Variables of a Micronesian Island Population, *Micronesica* Vol.5 No.1 1969
- (11) *ibid* : 2
- (12) F.Mahoney Land Tenure Patterns on Yap Island, in : *Laud Tenure Patterns in the Trust Territory of the Pacific Islands*, Guam : Trust Territory Handbook 1958 : 276~280
- (13) D.M.Schneider Abortion and Depopulation on a Pacific Island, in : *Peoples and Cultures of the Pacific* (A.P.Vayda ed.) 1968
- (14) *ibid*, 383
- (15) 矢内原 322~323頁
- (16) 矢内原 312頁。なお Müller 1917 : 234~241 および A.Senft Die Rechtssitten der Jap-Eingeborenen, *Globus* Bd, 91 1907 ウルンとヴェルツェが各々のヴァニバガルとバニピルンの指導者になり、マセバンとタセバンも各々の側につき、ドルチックの村は2つの側のいずれかに連らなっており、ミリンガイの村もウルンかマセバンの側につくともいう。
- (17) 村の階級が固定したのはドイツ時代からともいう。
- (18) 矢内原 325~327頁。Senfft 1907 : 149~151。
- (19) ビルン階級とミリンガイ階級の間にみられるのと類似した関係は、ウギリ管区のカチャバル、オネアン、リケン等の3村とウルシー、フェイス、ソロール等の中央カロリン諸島との間にみられる関係にみい出される。これら中央カロリン人はビマサウと総称されて、上記3村の酋長及び村民に対して編物、織物、帆布、椰子縄等を貢納する。彼等が来島する時は上記3村に滞在し、そのミリンガイに目せられ、彼等の滞在中の宿泊及び食物を供給せられる。さらにその帰島に際しては芋類、土器、椰子、レン(姜黄粉)等が贈られる。この外にギルマンのグロール村と西カロリン諸島のヌゴルの間にもみられる。この点に関しては W.A. Lessa *Ulithi and the Outer Native World*, *American Anthropologist* 52 1950
- (20) ラン村のワースによると、古くはラン村は第1位の村であったがギリフェス村との戦争の結果戦敗し、位がおちた。ラン村はマセバンであるという。
- (21) ルヌー村はヴァニバガルからギリフェス村側に移った村だという。
- (22) ペバイ及びファルンに関しては E.Schlesier *Die Erscheinungsformen des Männerhauses und das Klubwesen in Mikronesien* 1953 : 51~68

- (23) タリウに関しては、杉浦健一「ヤップ島民の聖地と祭祀」『南洋経済研究』6—10, 昭和48年。
S.Walleser *Religiose Anschauungen und Gebräuche der Bewohner von Jap*, *Anthropos* Vol.8
1913 I.Beaucclair *Über Religion and Magie auf Yap*, *Sociologus* Vol. 3 No. 1 1963 *On Religion and Mythology of Yap Island, Micronesia*, *Bulletin of the Institute of Ethnology* 等々。
- (24) Müller:243. *Kriegshauptlung*
- (25) D. M. Schneider *Political Organization, Supernatural Sanctions and the Punishment for Incest on Yap*, *American Anthropologist* Vol.59 1957。
- (26) なお、村の独自性については、D.Schneider *Double Descent On Yap*, *Journal of the Polynesian Society* Vol.71 1962。
- (27) 各村のエグムの名称については Müller : 246~247。
- (28) 村の各職能については Müller : 242~245。
- (29) F.Mahoney は *bang e binaw* と記している。F.Mahoney 1958。
- (30) D.M.Schneider 1962。
- (31) *ibid* : 3
- (32) M.D.Sahlins *Differentiation by adaptation in Polynesian Societies*, *Journal of the Polynesian Society* Vol.66 1957。
- (33) D.M. Schneider 1968,
- (34) D.M. Schneider 1962, F. Defngin 1964, Kim and Defngin 1964。
- (35) この点に関して、一般的及びダリプピナウの資料については、F.Mahoney : 1958が詳しい。
- (36) *ibid* : 255~266
- (37) したがって養子(ポフ)をする際は、子供が産まれる前、少くとも名前がつけられる前に取りきめがなされる。養子には養家の名前がつけられる。なおラン村のワースによると兄弟や親戚(ギリデエン)の子供をもらって育てるのをポフといい、貝貨を出してもらって育てるのをツワイということ。
- (38) D.M. Schneider 1962 : 6。
- (39) F.Mahoney : 276~280。
- (40) 矢内原 328~329頁, ガノンに関しては Müller : 216~222, Schneider 1962 : 7~8。
- (41) Schneider 1962 : 5。
- (42) この点は Senfft : 142
- (43) Schneider 1968 : 390~396。
- (44) この点の細目は、ヤップ支庁『ヤップ島風俗習慣概要』
- (45) 矢内原 320~322頁。Müller 246~248。
- (46) F.Defngin : 64~66
- (47) この点、次の神話が注目される。昔、なまがが殺されて4つに細断された。2つの部分は大地に、他の2つの部分は沼に埋められた。大地に埋められた頭の部分からヤシの樹が、次の部分からバナナが、沼地に埋められた部分からマル(サト芋)とラック(タロ芋)が発生した(Defngin : 52~54)。この神話にはヤム芋は出ていない。一方ヤム芋の起源神話は、特定の人間によってヤップにもたらされたという内容のものが多い。ことによるとヤム芋は比較的新しい(あるいは逆に古い)作物かも知れない。ここらになぜヤム芋がタアイであるかの理由をみい出せるかも知れない。
- (48) Defngin : 63~66。
- (49) 杉浦健一『原始経済の研究』昭和27年, 189~191頁。同「ヤップ島民の家屋使用慣習と家族生活」『人類科学』3, 1951年。
- (50) D.Schneider *Yap Kinship Terminology and Kin Groups*, *American Anthropologist* Vol. 55 1953。
- (51) Murdock *Anthropology in Micronesia*, *Transactions of the New York Academy of Sciences*, 2 1948。
- (52) Schneider 1862 : 15~17。
- (53) *ibid* : 10~13

64 *ibid* : 13。

65 馬淵東一「オナリ神をめぐる 類比と対比」『日本民族と南方文化』昭和43年。 T. Mabuchi The Two Types of Kinship Rituals among Malayo-Polynesian Peoples, *Proc. of the 9th Congress for the History of Religions* 1960, A Trend Toward the Omaha Type in the Bunun Kinship Terminology, in: *Echanges et Communications* 1971。

66 Schneider 1962 : 12

67 Müller : 126~133, 矢内原, 196~222, 杉浦健一「ヤップ島民の貨幣とその行使」『連合大会記事』第4回 1940年。 J.S.Kubary *Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archipel*, Heft. 1

68 Müller : 133

69 ここに引用しなかった文献としては, F.W.Chistian *The Caroline Islands* 1899, EW and D.D. Gifford *Archaeological Excavations in Yap Anthropological Records* 18:2 Univ. of California Pr. 1959, B.Stillfried *Die Soziale Organization in Mikronesien* 1953, L.Kohl-Larsen *Unter roten Hibiskus-Blüten* 1957.